

四條畷市文化財調査年報

第 8 号

中野遺跡 3

(墓ノ堂古墳)

二〇二一・三



卷頭写真図版 1



1. 調査地区全景（北から・NN1998-1）



2. 井戸 1 馬齒出土状況（北から・NN1999-2）

卷頭写真図版2



1. 墓ノ堂古墳垂直写真



2. 墓ノ堂古墳赤色立体地図



3. 墓ノ堂古墳1995立会 出土埴輪集合

四條畷市文化財調査年報

第 8 号

中野遺跡 3
(墓ノ堂古墳)



令和3（2021）年3月

四條畷市教育委員会

例　　言

1. 本書は、四條畷市文化財調査年報の第8号であり、四條畷市文化財調査報告の第60集である。本書には、平成24（2012）年6月に宅地造成に伴い（N N2012-2）、平成11（1999）年9月に店舗建設に伴い（N N1999-2）、平成10（1998）年8～9月に宅地造成に伴い（N N1998-1）、平成10（1998）年1月に宅地造成に伴い（N N1997-1）、中野遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。関連資料として周辺での立会調査（墓ノ堂古墳）の概要を報告する。
2. 中野遺跡（N N2012-2）の発掘調査は丹治尋好から、中野遺跡（N N1999-2）の発掘調査は川本産業株式会社から、中野遺跡（N N1998-1、1997-1）の発掘調査は株式会社中野工務店からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が調査を実施した。調査期間等は本文中に記載する。
3. 中野遺跡（N N2012-2）の発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主任 村上 始・事務職員 實盛良彦を担当者として、中野遺跡（N N1999-2、1998-1、1997-1）の発掘調査は、四條畷市教育委員会生涯学習推進室主任 野島 稔の指導のもと、技術職員 村上 始を担当者として実施した。（肩書はいずれも当時）
4. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

地元自治会、大阪府教育庁文化財保護課、櫻井敬夫氏（故人）、瀬川芳則氏（元関西外国语大学教授）、謙早直人氏（京都府立大学准教授）、和田一之輔氏、大澤正吾氏（奈良文化財研究所）、村瀬 陸氏（奈良市教育委員会）、柴田将幹氏（田原本町教育委員会）、柴原聰一郎氏（東京大学大学院）、丸山 亮氏（奈良大学大学院）、野島 稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐野 喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館館長）。（順不同）
5. 出土遺物の整理・図面作成などは、調査当時の一次整理に加え、四條畷市教育委員会生涯学習推進課上席主幹兼主任 村上 始、主任 實盛良彦、任期付職員 古谷真人が、会計年度任用職員 田伏美智代の協力を得て行った。
6. 本書は、村上、實盛、古谷が分担して執筆、編集を行った。文責者は各文末に記載している。
7. 発掘調査の出土遺物および記録した写真、実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。
2. 土色の色調は、1998年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 報告図面の表示方位は、N N1998-1調査は調査当時標準であった（旧）日本測地系の国土座標（第VI座標系）に基づく座標北、N N2012-2、1999-2、1997-1調査は磁北、それ以外は世界測地系の国土座標（第VI座標系）に基づく座標北である。

本 文 目 次

卷頭写真図版

例 言・凡 例

目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	6
第1節 遺跡の位置	
第2節 周辺の歴史的環境	
第2章 調査の経過	10
第1節 既往の調査	
第2節 調査の経過	
第3章 中野遺跡（N N2012－2）調査の成果	13
第1節 基本層序	
第2節 検出遺構	
第3節 出土遺物	
第4章 中野遺跡（N N1999－2）調査の成果	17
第1節 基本層序	
第2節 検出遺構	
第3節 出土遺物	
第5章 中野遺跡（N N1998－1）調査の成果	22
第1節 基本層序	
第2節 検出遺構	
第3節 出土遺物	
第6章 中野遺跡（N N1997－1）調査の成果	29
第1節 基本層序	
第2節 検出遺構	
第3節 出土遺物	
第7章 中野遺跡（墓ノ堂古墳）調査の成果	32
第1節 航空レーザ測量調査	
第2節 1995年立会調査	
第3節 1998年立会調査	
第4節 2011年立会調査	
第8章 調査のまとめ	41
第9章 墓ノ堂古墳の検討—大上古墳群の盟主墳—	42
参 考 文 献	52
写 真 図 版	
報 告 書 抄 錄	

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	7
第2図	調査地区位置図	11
第3図	調査地区平面図・出土遺物（NN2012-2）	14
第4図	調査地区断面図（NN2012-2）	15
第5図	調査地区平面図・断面図（NN1999-2）	18
第6図	出土遺物（NN1999-2）	20
第7図	調査地区平面図（NN1998-1）	23
第8図	調査地区断面図（NN1998-1）	24
第9図	出土遺物（NN1998-1）	26
第10図	調査地区平面図・断面図・出土遺物（NN1997-1）	30
第11図	墓ノ堂古墳 墳丘測量図・断面図	33
第12図	調査地区位置図・断面図（墓ノ堂古墳1995・1998・2011立会）	34
第13図	出土遺物（墓ノ堂古墳1995円筒埴輪・1998・2011）	36
第14図	出土遺物（墓ノ堂古墳1995形象埴輪①）	38
第15図	出土遺物（墓ノ堂古墳1995形象埴輪②）	39
第16図	調査地区平面図・断面図（墓ノ堂古墳2011立会）	40
第17図	墓ノ堂古墳 墳丘復元図	44
第18図	墓ノ堂古墳と墳形が類似する古墳	44
第19図	大上古墳群出土埴輪・鉄製品	47
第20図	大上古墳群出土円筒埴輪の変遷	49
第21図	墓ノ堂古墳と大上古墳群の位置関係	50
第1表	大上古墳群出土埴輪の組成	46

写 真 図 版 目 次

卷頭写真図版1	1. 調査地区全景（北から・NN1998-1） 2. 戸戸1馬歯出土状況（北から・NN1999-2）
卷頭写真図版2	1. 墓ノ堂古墳垂直写真 2. 墓ノ堂古墳赤色立体地図 3. 墓ノ堂古墳1995立会 出土埴輪集合

- 写真図版 1 1. 調査地区近景（南西から・N N 2012-2）
2. 調査地区近景（北から・N N 2012-2）
3. 調査地区近景（北から・N N 2012-2）
- 写真図版 2 1. 調査地区全景（南東から・N N 1999-2）
2. 溝4遺物出土状況（北西から・N N 1999-2）
- 写真図版 3 1. 井戸1断面（南から・N N 1999-2）
2. 井戸1馬齒出土状況（西から・N N 1999-2）
- 写真図版 4 1. 調査地区近景（東から・N N 1998-1）
2. 掘立柱建物全景（西から・N N 1998-1）
- 写真図版 5 1. 土坑5（井戸）井戸枠内検出状況（東から・N N 1998-1）
2. 溝3遺物出土状況（西から・N N 1998-1）
- 写真図版 6 1. 調査地区全景（北から・N N 1997-1）
2. 調査地区断面（北西から・N N 1997-1）
- 写真図版 7 1. 調査地区全景（東から・墓ノ堂古墳1995立会）
2. 調査地区断面（西から・墓ノ堂古墳1995立会）
- 写真図版 8 1. 確認調査トレンチ全景（西から・墓ノ堂古墳2011立会）
2. 墓ノ堂古墳全景（昭和53年頃）
- 写真図版 9 1. 墓ノ堂古墳・大上古墳群垂直写真（昭和23年3月27日米軍撮影・国土地理院）
2. 墓ノ堂古墳垂直立体写真（昭和23年3月27日米軍撮影・国土地理院）
- 写真図版10 1. N N 2012-2 出土遺物
2. N N 1999-2 出土遺物（溝・土坑・包含層）
- 写真図版11 1. N N 1999-2 出土遺物（土坑・Pit）
2. N N 1999-2 出土遺物（井戸1）
- 写真図版12 1. N N 1998-1 出土遺物（溝・土坑・Pit）
2. N N 1998-1 出土遺物（溝3・土坑1）
- 写真図版13 1. N N 1998-1 出土遺物（包含層）
2. N N 1997-1 出土遺物
- 写真図版14 1. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（円筒埴輪・表）
2. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（円筒埴輪・裏）
- 写真図版15 1. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（形象埴輪①・表）
2. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（形象埴輪①・裏）
- 写真図版16 1. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（形象埴輪②・表）
2. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（形象埴輪②・裏）
- 写真図版17 1. 墓ノ堂古墳1998・2011立会 出土遺物
2. 大上古墳群出土遺物
- 写真図版18 1. 大上10号墳（O G 1998-1）出土鉄製品
2. 大上16号墳（N S 1996-1）出土遺物

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。中野遺跡は、飯盛山系の西側の山裾部に位置する遺跡である。

第2節 周辺の歴史的環境

中野遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物がみつかっている(第1図)。

旧石器時代 讚良川床遺跡では旧石器時代の握斧・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している(櫻井1972)。また、忍岡古墳付近では、縦長刺片を用いたナイフ形石器が採集されている(片山1967a)。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形尖頭器が出土している(野島・藤原・花田1976)。

縄文時代 縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡(野島1978b)、四條畷小学校内遺跡(野島1994c)、木間池北方遺跡(村上1997a)などでみつかっている。讃良郡条里遺跡の第二京阪道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている(井上ほか編2003、佐伯ほか編2007、井上編2008等)。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている(野島1978b、1988)。

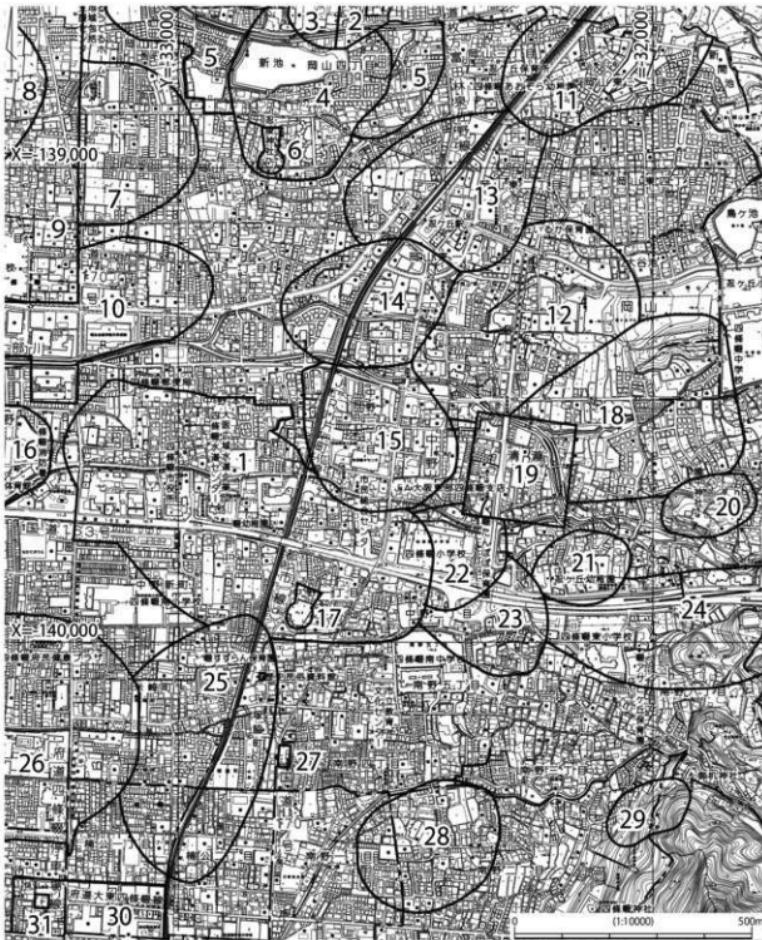
砂遺跡では中期から晩期の集落跡がみつかっている(宮野1992、四條畷市教育委員会編2008)。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の讃良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製祭祀具をはじめ、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土壙墓が複数確認されている(片山1967b、桜井1972、宮野1992、野島編2000)。

弥生時代 弥生前期初頭の土器が縄文晩期の突蒂文土器とともに讃良郡条里遺跡の2005年の調査でみつかっている(中尾ほか編2009)。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稲作の初現を示す遺物として重要である。讃良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地上の集落が検出されている(後川・實盛・井上編2015)。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点的集落である。前期では板付II式併行期に属する大形壺の出土や(野島1984a)、集落の検出がある(村上2001f、村上・實盛2019a)。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している(辻本1987、野島1987a、野島1994a、阿部1999)。焼失竪穴建物や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分岐形土製品やト骨・銅鐸の舌や播磨地域の土器などが出土している(野島1994a、村上・實盛2011)。また2011年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、竪穴建物群や方形周溝墓などが検出され(野島1987a、阿部1999)、丹後・近江・出雲・山陰地域系の土器類などを含む多くの遺物が出土している(三好ほか2007)。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治44年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸2口が出土したと伝えられ(梅原1985)、現在関西大学が所蔵している。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が5基みつかっている(野島1994b)。1号方形周溝墓には墳丘のほぼ中に埋葬施設が1基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。2号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|---------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 中野遺跡 | 2. 讀良川床遺跡 | 3. 讀良寺跡 | 4. 更良岡山古墳群 | 5. 更良岡山遺跡 |
| 6. 忍岡古墳 | 7. 北口遺跡 | 8. 砂遺跡 | 9. 讀良部条里遺跡 | 10. 奈良田遺跡 |
| 11. 坪井遺跡 | 12. 岡山南遺跡 | 13. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 14. 南山下遺跡 | 15. 奈良井遺跡 |
| 16. 鎌田遺跡 | 17. 墓ノ堂古墳 | 18. 清滝古墳群 | 19. 正法寺跡 | 20. 国中神社内遺跡 |
| 21. 大上遺跡 | 22. 四條畷小学校内遺跡 | 23. 木間池北方遺跡 | 24. 城遺跡 | 25. 南野米崎遺跡 |
| 26. 雁屋遺跡 | 27. 伝和田賀秀墓 | 28. 南野遺跡 | 29. 近世墓地 | 30. 楠公遺跡 |
| 31. 伝楠木正行墓 | | | | |

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が（野島1994c）、都屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が（岩瀬編2012）、中野遺跡で中期の方形周溝墓が検出されている（村上・實盛2018）。

古墳時代 讀良川流域で古墳時代前期中頃に全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳が築造されている（梅原1937）。主体部は竪穴式石室（石槨）で、碧玉製の石鉗・鍵形石・紡錘車・鉄劍・鐵鎌・小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴うとみられる前期の集落は、讀良郡条里遺跡で微高地上の集落が検出されている（井上編2008、近藤ほか編2006、佐伯ほか編2007、後川・實盛・井上編2015）。また岡山南遺跡でも集落を検出している（村上・實盛2016）。

中～後期の古墳としては前方後円墳である墓ノ堂古墳があり、立会調査で円筒埴輪片が出土している（野島1997c、本書）。忍ヶ丘駅前1号墳では琴を彈く男性埴輪が出土している（野島1993a、1997a）。清滝古墳群（野島1980a）や大上古墳群（村上・實盛編2017）、更良岡山古墳群（野島1981）などは中期から後期まで続く馬飼い集団の墓域とみられる。中でも城遺跡内の大上3号墳は周溝を含めた全長が約45mある帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と埴丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した（村上2006）。清滝古墳群2号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた（野島1980a）。大上5号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盜掘されていたが、金銅装中空耳環が1点出土した（野島1999、四條畷市教育委員会編2002）。

J R忍ヶ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪（櫻井・佐野・野島2006、2010等）、南山下遺跡で馬形埴輪（野島1987c、d）、岡山南遺跡で家形埴輪が出土しており（野島1982）、一緒に左足用の木製下駄も出土している（野島1979a、1982、瀬川1992）。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われており、奈良田遺跡（野島1980c、野島・村上2000）、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡（村上2000等）、城遺跡・大上遺跡（村上2006）、南野米崎遺跡（野島1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編2004）などの集落遺跡で馬骨・馬齒をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓式系土器等が数多く出土している。讀良郡条里遺跡で5世紀初頭の馬骨の出土がみられ（中尾ほか編2009）、都屋北遺跡では馬具の鉗・ハミ・鞍や、井戸枠に再利用された準構造船、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる（岩瀬ほか編2010、岩瀬編2012）。鎌田遺跡では溝からスリザサラや木鐵、祭具を載せる台等の祭祀遺物が出土し（村上2001c、d、e）、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している（野島1980b、野島・村上2000、野島・村上・實盛2012）。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讀良郡条里遺跡では水田跡がみつかっている（野島1993b、中尾ほか編2009等）。讀良郡条里遺跡の2011年度の調査では水路の堤防構築に敷葉を使った工法が用いられていた（後川・實盛・井上編2015）。北口遺跡では緑色凝灰岩質の石核が出土し、中期に玉類の製作が行われたとみられる（村上・實盛2014）。

古代以降 正法寺跡は、7世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である（大阪府教育委員会編1970）。一方、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であった（村上2001a）。ただし、中門は礎石建物で（野島・藤原・花田1977）、塔は石積みの遺構を伴っていた（大阪府教育委員会編1970）。また回廊の南西部分にあたると推定される位置の瓦だまりから創建時の翫尾片が出土している（野島・村上2002）。

讀良寺跡は1969年に部分的に調査され、暗渠の可能性がある瓦敷きなどを検出し、7世紀の創建であることが分かった（桜井1972、櫻井・佐野・野島2006、2010）。1997年の調査では正法寺跡のものと同范の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており（野島編2000）、文様に型起因の摩耗がみられる事から、讀良寺のものが後に作られたと考えられている（野島1997b）。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡がみつかっている。正法寺近辺では河川跡の数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれており、木間池北方遺跡で円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した（村上2006）。木間池北方遺跡で「□万呂」（村上2006）、南野遺跡では「大」の字を墨書きした土器が出

土している(野島1995)。讃良郡条里遺跡では小型海獸葡萄鏡が出土しており、有力者が祭祀に用いたとみられる(後川・實盛・井上編2015)。また、讃良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割施行例として注目される(中尾・山根編2009)。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡、讃良郡条里遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡(村上2000)、木間池北方遺跡(村上2006)、蔀屋北遺跡(岩瀬ほか編2010)などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書きされた土師器环や(村上2006)、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書き曲物井戸枠が出土している(村上2003、村上・實盛2019b)。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されており(野島・藤原・花田1976、野島1987b)、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書き土器が出土している(野島1987a)。讃良郡条里遺跡では皇朝十二銭を用いた溝内祭祀跡を検出している(後川・實盛・井上編2015)。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡(村上2003a)、南山下遺跡(野島・村上2001、村上2001b)、岡山南遺跡(野島・藤原・花田1976、野島1982、野島・前田1984、野島1987b、村上2004、村上・實盛2013a)、中野遺跡(野島1977、1986b、西尾1987)、忍ヶ丘駅前遺跡(野島1983、村上1997b)、四條畷小学校内遺跡(村上2000)、大上遺跡(村上2006)、木間池北方遺跡(村上1997a)、南野遺跡(野島1995)、蔀屋北遺跡(岩瀬ほか編2010)、讃良郡条里遺跡(後川・實盛・井上編2015)、南野米崎遺跡、楠公遺跡、葦屋遺跡等で集落跡等がみつかっている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工房の跡とそれに伴う土壙墓がみつかっており(野島1996a、b)、工房跡では鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷付近では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一部を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛城跡は大東市教育委員会によって調査が行われ(黒田1989)、平成23年度には城跡の詳細な縄張図を測量・作成した(村上・實盛編2013、黒田2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013)。その後四條畷、大東両市により城跡の総合調査に着手し、石垣、瓦、礎石建物という織豊系城郭の要素を先駆的に導入した画期となる戦国城郭であることが判明した(李編2020)。

室町時代後期の16世紀中頃に讃良郡条里遺跡内の大將軍社が創建され、明治44年に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めた。発掘調査では御正躰あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量の灯明皿が出土し、文献に記録されていた「百灯明」の祭りの存在が裏付けられている(後川・實盛・井上編2015)。

(實盛良彦)

第2章 調査の経過

第1節 既往の調査

中野遺跡は、四條畷市中野本町・中野新町・中野一～三丁目に広がる遺跡で、古墳時代・中世の集落跡である。この遺跡は1977年に大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴い発見され、中世の石組井戸などや、古墳時代中期の大溝がみつかった(野島1977、1986b)。この大溝からは朱塗りの壺や滑石製玉類、馬の下頬骨等が出土している(野島1986b、四條畷市教育委員会編2004)。またその後の二次調査では、隅丸方形の周溝状遺構を検出し、多量の漆が入った須恵器把手付碗や製塙土器等が出土している(野島1977、1978c、1986b)。

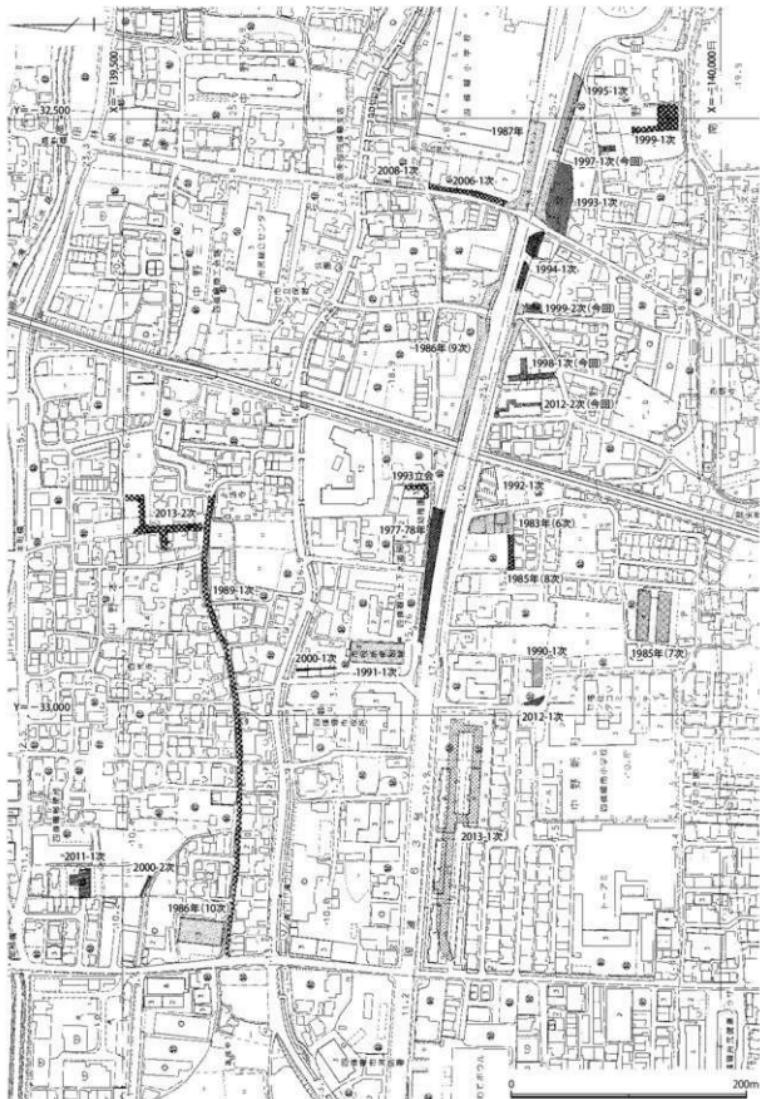
同年からは国道163号の拡幅工事に伴う調査が始まり、数次にわたって調査が行われた(野島1978a、西尾1987、1988、村上2000、2006)。1977～1978年の調査では、平安時代～室町時代の集落跡が確認され、室町時代の石組井戸から花崗岩の石臼が出土した(野島1978a)。この調査では硬玉製勾玉など古墳時代の遺物も出土している。1986年の調査でも中世の集落跡を確認したほか、古墳時代中期～後期の大溝から人物埴輪片や滑石製玉類、舟形木製品などが出土した(西尾1987)。1987～1988年の調査では古墳時代中期後半の井戸から板に乗せられた状態で馬頭骨が出土した(西尾1988)。井戸廃絶時に犠牲とされたものと考えられている(四條畷市教育委員会編2004)。1994年の調査では、古墳時代後期前半の落込から滑石製子持勾玉などが出土した(村上2000)。1996年の調査では奈良時代末～平安時代ごろの方形横板枠井戸を検出し、井戸内から「日置」と墨書きされた土師器坏が出土した(村上2006)。

この間他の開発に伴う調査も多く行われており、1977年の旧国鉄片町線(現JR学研都市線)複線化工事に伴う調査では古墳時代後期の掘立柱群を検出している(野島1977)。1983・1985年の民間開発に伴う調査でも古墳時代の遺物が出土している(野島・前田1984、野島1986a)。1985年のマンション建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の井戸を検出し、井戸内からは石製玉類や多量の製塙土器などが出土した(野島1986b)。1986年の倉庫・事務所建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の掘立柱建物や竪穴建物等を検出し、井戸から馬形木製品が出土した(松岡1987)。1989年度の公共下水道工事に伴う調査では、弥生時代～近代の資料が出土した。特筆すべきものとしては古墳時代の大量の玉類、奈良時代の青銅製鎧帶(丸鞘)、皇朝十二銭の餽益神寶、江戸時代の銅鏡などがあった(整理中・野島1990)。1990年度と2012年度1次の旧法務局関連の調査では古墳時代中期の集落を検出した(村上・實盛2018)。1991～1992年の市役所東別館新築工事に伴う調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭ごろの方形縦板枠井戸を検出し、その底部の井戸枠に使われていた曲物には「應保二年 如月廿日」の墨書きがあった(村上2003b、村上・實盛2019)。また溝からは青銅製鎧帶(巡力)や長年大宝が出土した。1992年にはマンション建設工事に伴い中世及び古墳時代の集落跡を検出した(村上・實盛2018)。

1993年のガソリンスタンド建設に伴う調査では横穴式石室を検出している(村上2006・四條畷市史編さん委員会編2016)。石室は床面のみの残存であったが、玄室から羨道へ延びる石組排水溝を確認した。

1997年度(本書)、1998年度(本書)、1999年度1次調査(整理中)では古墳時代から古代にかけての集落跡を、1999年度2次調査(本書)では古墳時代の集落跡を検出した。1999年度1次調査では竪穴建物2基を検出した。

2007年から2009年にかけて主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴って2次にわたって行った調査では古墳時代の区画溝を検出し(村上・實盛2013a)、隣接する古墳時代祭祀遺跡である奈良井遺跡とのつながりが明らかになってきた。2011年度の調査では、平安後期～鎌倉前期の集落を検出し、「延任」の人名が書かれた木簡が出土した(村上・實盛2014)。2012年度2次調査では古墳時代の集落跡を検出した(本書)。2013年度の調査では平安時代から中世にかけての集落跡・古墳時代の集落跡・弥生時代の方形周溝墓を検出した(村上・實盛2018)。特に弥生時代の遺構は中野遺跡では初の確認であった。同年度の2次調査では古代～中世の集落を確認した(整理中)。二重構造の重厚なつくりの井戸では年輪年代測定により708年+ α の年代が明らかになった。



第2図 調査地区位置図

第2節 調査の経過

平成24年度第2次の発掘調査（N N2012-2）については、四條畷市中野一丁目731番3において宅地造成工事が計画され、平成24（2012）年5月18日に丹治尋好氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第93条第1項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。同年6月20日付け教委文第1-894号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

この箇所については、平成21（2009）年2月17日に、文化財保護法第99条第1項の規定に基づき4か所のトレチを設定し遺跡の範囲確認調査を行っており、古墳時代を中心とした遺物包含層および集落跡と思われる遺構面を確認していた。その結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される擁壁建設予定地の発掘調査を実施することになった。平成24年6月1日付で発掘調査承諾書の提出があり、同年5月31日付畷教社第244号で、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は約123m²で、調査期間は平成24（2012）年6月4日から11日までであった。調査は範囲確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成24年6月12日付畷教社第290号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年6月15日に第1186号で受理された。大阪府教育委員会には同年6月12日付畷教社第291号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年9月4日付教委文第3-89号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計1箱であった。

平成11年度第2次の発掘調査（N N1999-2）については、四條畷市中野一丁目721-1ほかにおいて飲食店舗建設工事が計画され、平成11（1999）年6月11日付で川本産業株式会社から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。同年9月7日に、計画用地内に3か所のトレチを設定し確認調査を実施した結果、1か所で古墳時代の遺物包含層および集落跡と思われる遺構面を確認した。その結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される駐車場予定地の一部の発掘調査を実施することになった。調査面積は約145m²で、調査期間は平成11（1999）年9月13日から17日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計2箱であった。

平成10年度第1次の発掘調査（N N1998-1）については、四條畷市中野一丁目727-1において宅地造成工事が計画され、平成10（1998）年7月24日付で株式会社中野工務店大崎忍氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは発掘調査が必要との指導があった。

平成10年8月7日に、計画用地内に6か所のトレチを設定し確認調査を実施した結果、古墳時代～古代の遺物包含層および集落跡と思われる遺構面を確認した。その結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される道路予定地の発掘調査を実施することになった。調査面積は約262m²で、調査期間は平成10（1998）年8月25日から9月9日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計3箱であった。

平成9年度第1次の発掘調査（N N1997-1）については、四條畷市中野二丁目894-1において宅地造成工事が計画され、平成10（1998）年1月13日付で株式会社中野工務店大崎忍氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは発掘調査が必要との指導があった。

平成10年1月14日に、計画用地内に1か所のトレチを設定し確認調査を実施した結果、古墳時代～古代の遺物包含層および集落跡と思われる遺構面を確認した。その結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される道路予定地の発掘調査を実施することになった。調査面積は約79m²で、調査期間は平成10（1998）年1月26日から29日までであった。調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計2箱であった。
(實盛)

第3章 中野遺跡（N N2012-2）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区は、調査前にはさつきゲートボール場の跡地で、1.1～1.3mほど盛土されており、その下層は約0.2mの耕土と約0.05～0.15mの床土が存在した。その下層は0.1～0.3mほど平安時代および古墳時代の包含層が堆積していた。その下層は浅黄色の粘土層で、地山であり、その上面が古墳時代を中心とした遺構面であった（第4図）。
（村上・始・實盛）

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、多くが古墳時代のもので、溝、土坑、Pitであった（第3図、写真版1）。遺構面の標高は北端でT.P.+18.333m、南端でT.P.+18.635mであった。以下、遺物を掲載した主な遺構について遺構の種類ごとに詳述する。なお遺構の番号は、遺物が出土したもののみ、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。

Pit19 調査地区北寄りで検出した。直径0.2mの円形で、深さは約0.1mである。上端の標高はT.P.+18.516m、下端はT.P.+18.455mであった。須恵器环身（第3図-1）、土師器甕（第3図-2）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考える。

Pit22 調査地区北寄りで検出した。直径0.45mの円形で、深さは約0.3mである。上端の標高はT.P.+18.414m、下端はT.P.+18.131mであった。須恵器环蓋（第3図-3）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考える。

Pit25 調査地区北寄りで検出した。遺構北側は溝により切られている。遺構東側は調査地区外である。検出できた規模は東西0.35m、南北0.25mで、深さは約0.1mである。上端の標高はT.P.+18.427m、下端はT.P.+18.340mであった。土師器甕（第3図-4）などが出土した。出土遺物から古墳時代の遺構と考える。

土坑5 調査地区南寄りで検出した。遺構北側は別のPitにより切り離されている。直径0.6mの円形とみられ、深さは約0.3mである。上端の標高はT.P.+18.689m、下端はT.P.+18.396mであった。土師器甕（第3図-5）などが出土した。古墳時代の遺構と考える。

土坑8 調査地区南寄りで検出した。直径0.4mの円形で、深さは約0.1mである。上端の標高はT.P.+18.649m、下端はT.P.+18.515mであった。須恵器环身（第3図-6）などが出土した。出土遺物から古墳時代後期の遺構と考える。

土坑13 調査地区中央で検出した。直径0.3mの円形で、深さは約0.1mである。上端の標高はT.P.+18.553m、下端はT.P.+18.411mであった。製塙土器（第3図-7）などが出土した。出土遺物から古墳時代の遺構と考える。

土坑16 調査地区中央で検出した。直径0.4mの円形で、深さは約0.2mである。上端の標高はT.P.+18.530m、下端はT.P.+18.368mであった。土師器底部（第3図-8）などが出土した。出土遺物から古墳時代の遺構と考える。
（村上・實盛）

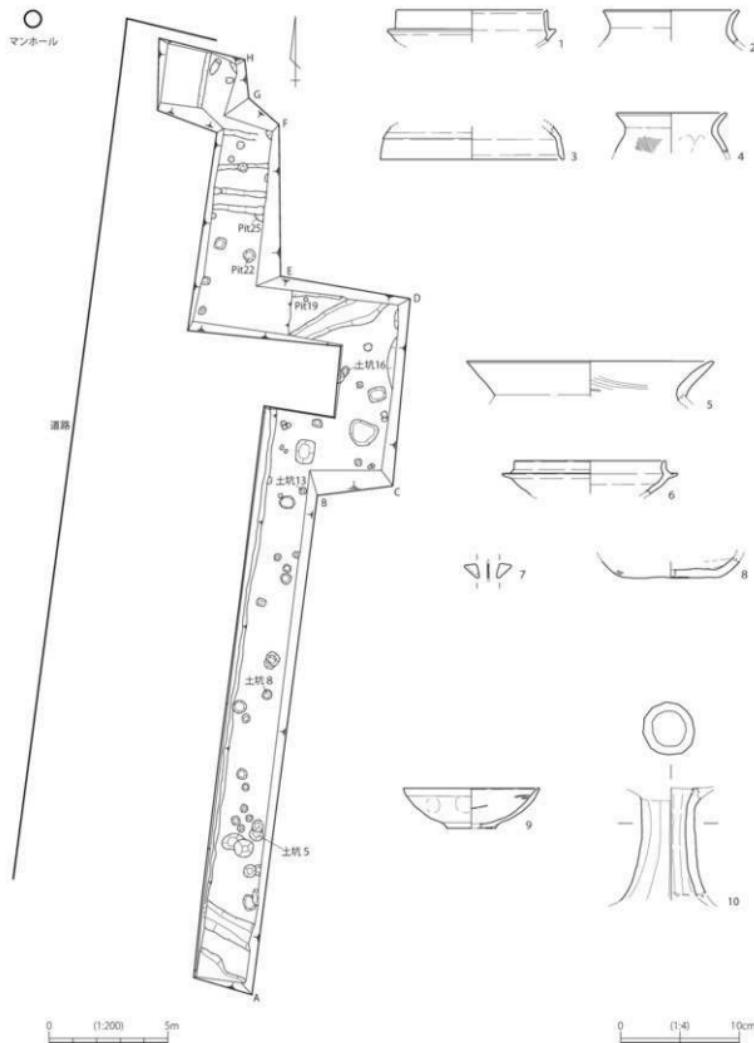
第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

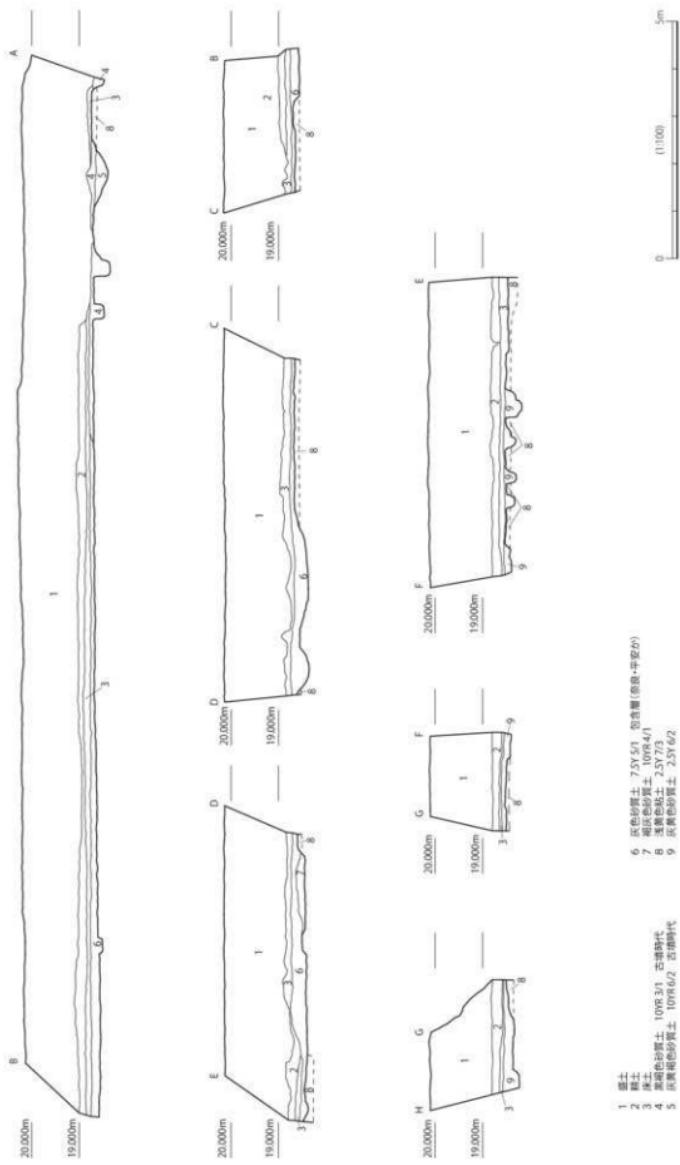
Pit19

須恵器

1 环身 口径：12.8cm（復元）。器高：2.7cm（残存）。厚さ：0.3cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB 5/1）。胎土：やや密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。受け部は立ち



第3図 調査地区平面図・出土遺物 (N N2012-2)



第4図 調査地区断面図 (NN2012-2)

上がらずりい。口縁部内面に内傾する段をもつ。MT15型式（II型式1段階）である。（第3図-1、写真図版10-1-1）

土師器

2 瓢 口径：11.4cm（復元）。器高：3.6cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内・断面は橙色（2.5YR 7/6）。胎土：やや密。直径1mm程度の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。古墳時代の小型甕である。（第3図-2、写真図版10-1-2）

Pit22

須恵器

3 环蓋 口径：15.4cm（復元）。器高：2.8cm（残存）。厚さ：0.5～0.6cm。色調：外面は灰白色（N 6/7）、内・断面は灰白色（N 7/7）。胎土：やや密。直径2mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。天井部の稜線はわずかに残る。MT15型式（II型式1段階）。（第3図-3、写真図版10-1-3）

Pit25

土師器

4 瓢 口径：9.4cm（復元）。器高：3.3cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内・断面は橙色（2.5YR 6/6）。胎土：やや粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。古墳時代の小型甕で、5世紀後葉から6世紀前葉のものと思われる。（第3図-4、写真図版10-1-4）

土坑5

土師器

5 瓢 口径：20.8cm（復元）。器高：3.0cm（残存）。厚さ：0.8cm。色調：外面は浅黄橙色（10YR 8/3）、内・断面にはぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。（第3図-5、写真図版10-1-5）

土坑8

須恵器

6 环身 口径：12.8cm（復元）。器高：2.9cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は灰白色（N 7/7）。胎土：やや密。直径1mm程度の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。TK10型式MT85号窯段階（II型式3段階）である。（第3図-6、写真図版10-1-6）

土坑13

7 製塙土器 幅：0.7～0.8cm。長さ：0.7cm。厚さ：0.1～0.2cm。色調：外は橙色（2.5YR 7/6）、内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：粗。焼成：不良。残存度：小片。（第3図-7、写真図版10-1-7）

土坑16

土師器

8 瓢 底径：8.0cm（復元）。器高：1.4cm（残存）。厚さ：0.6～0.7cm。色調：外・内・断面は赤橙色（10R 6/6）、内・断面にはぶい橙色（5YR 7/4）。胎土：粗。直径4mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第3図-8、写真図版10-1-8）

2. 包含層出土遺物

瓦器

9 碗 口径：11.4cm（復元）。高台径：4.2cm（復元）。器高：3.4cm。高台高：0.3cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外面は淡黄褐色（2.5Y 8/3）、内・断面は灰白色（N 8/8）。胎土：粗。直径4mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：1/5。口縁部外面はナデ調整を行い、内面端部にはわずかに段差が残る。外面はユビオサエ調整を行い、内面はヘラミガキがみられる。大和型III-E段階にあたる。（第3図-9、写真図版10-1-9）

土師器

10 高环 幅：7.2cm。器高：9.6cm（残存）。厚さ：0.7～0.8cm。色調：外面は橙色（2.5YR 6/8）、内・断面は赤橙色（10R 6/6）。胎土：密。直径3mm以下の砂粒含む。焼成：良好。残存度：小片。内外面はナデ調整。8世紀後半と思われる。（第3図-10、写真図版10-1-10）（古谷真人）

第4章 中野遺跡（N N1999-2）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区は、調査前には宅地であった。宅地とするために0.15mほど盛土されており、その下層は耕土、床土ではなく0.1~0.3mほど遺物包含層が堆積していた。その下層は黄色の粘土層で、地山であり、その上面が古墳時代を中心とした遺構面であった（第5図）。

（村上・實盛）

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、古墳時代と飛鳥時代のもので、井戸、溝、土坑、Pitであった（第5図、写真図版2・3）。遺構面の標高は北東端でT.P.+20.939m、北西端でT.P.+20.914m、南東端でT.P.+20.869m、南西端でT.P.+20.784mであった。以下、遺物を掲載した主な遺構について遺構の種類ごとに詳述する。なお遺構の番号は、遺物を出土したもののみ、遺構の種類ごとの検出順に通し番号でつけた。

溝2 調査地区中央東寄りで検出した。南西端は他の土坑により切られる。検出状況から、溝4と一連のものである可能性がある。検出規模は長さ0.6m、幅0.3m、深さは約0.1mである。標高は上端がT.P.+20.909m、底部がT.P.+20.867mであった。須恵器台（第6図-14）などが出土した。古墳時代中期の遺構と考える。

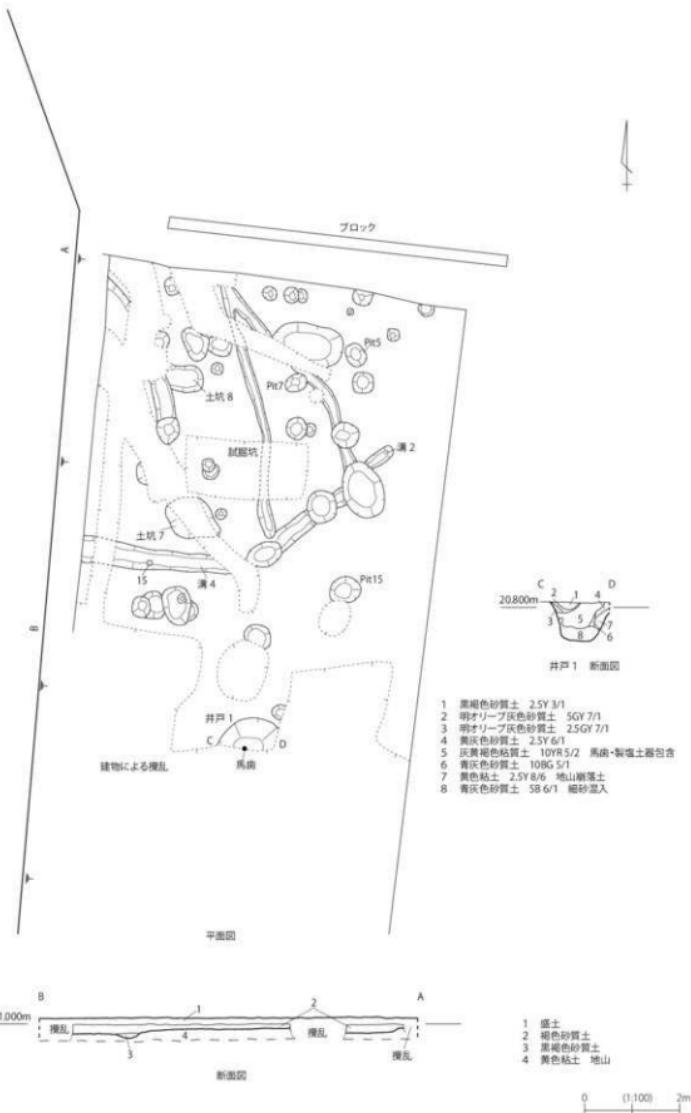
溝4 調査地区中央西寄りで検出した。東端は後世の攢乱により失われ、西端は調査地区外に延びる。検出状況から、溝2と一連のものである可能性がある。検出規模は長さ3.1m、幅0.6m、深さは約0.2mである。標高は中央部分の北側上端がT.P.+20.845m、南側上端がT.P.+20.815m、底部がT.P.+20.645mで、西端部分の北側上端はT.P.+20.790m、南側上端はT.P.+20.784m、底部はT.P.+20.699mであった。土師器高环（第5・6図-15）などが出土し、古墳時代中期の遺構と考える。

井戸1 調査地区南端で検出した。遺構南半は既存建物により失われていた。素掘りの井戸とみられ、断面図8肩上面で井戸廃絶時の祭祀に伴うとみられる馬齒を検出した。馬齒の出土標高はT.P.+20.623mである。検出した馬齒は3本のみであったが、その周辺で平面二等辺三角形状に白色物質が点在し、その付近のみ黒色系の粘質土が堆積しているのを確認しており（巻頭写真図版1-2）、1987年度調査でも検出したように（西尾1988）、馬の頭部が腐食、一部遺存したものである可能性がある。検出規模は東西1.2m、南北0.7mで、深さは約0.8mである。上端の標高はT.P.+20.909m、下端はT.P.+20.118mであった。上記馬齒（写真図版3-2）のほか、須恵器環蓋（第6図-16、17）、壺（第6図-18）、土師器高环（第6図-20~22）、櫃（第6図-23）、甕（第6図-24）、韓式土器（第6図-25）、製塙土器（第6図-26、写真図版11-2）などが出土し、古墳時代中期の遺構と考える。

土坑7 調査地区中央西寄りで検出した。遺構中央は後世の攢乱により失われていた。東西0.9m、南北0.9mの闊丸方形である。検出できた深さは約0.2mである。上端の標高はT.P.+20.924m、下端はT.P.+20.758mであった。土師器高环（第6図-11）などが出土した。出土遺物から飛鳥時代の遺構と考える。

土坑8 調査地区北西寄りで検出した。遺構西端の一部は他の溝により切られており、さらに後世に攢乱されていた。検出規模は東西0.8m、南北0.6mで、闊丸方形の遺構とみられる。深さは約0.3mである。上端の標高はT.P.+20.941m、下端はT.P.+20.606mであった。土師器碗（第6図-12、13）、壁土（写真図版11-1）などが出土した。飛鳥時代の遺構と考える。

Pit5 調査地区北東寄りで検出した。東西0.4m、南北0.5mの椭円形である。深さは約0.2mである。上端の標高はT.P.+20.916m、下端はT.P.+20.709mであった。製塙土器（写真図版11-1）などが出土した。出土遺物から古墳時代の遺構と考える。



第5図 調査地区平面図・断面図(N N1999-2)

Pit7 調査地区北寄りで検出した。直径0.4mの円形である。深さは約0.2mである。上端の標高はT.P.+20.907m、下端はT.P.+20.684mであった。韓式系土器（写真図版11-1）などが出土した。出土遺物から古墳時代の遺構と考える。

Pit15 調査地区中央東寄りで検出した。直径0.6mの円形で、南端の一部が後後に搅乱されている。深さは約0.2mである。上端の標高はT.P.+20.939m、下端はT.P.+20.726mであった。製塙土器（写真図版11-1）などが出土した。出土遺物から古墳時代の遺構と考える。

（村上・實盛）

第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

土坑7

11土師器高環脚部 底径：10.0cm（復元）。器高：7.8cm（残存）。厚さ：0.2～0.8cm。色調：外・内・断面にぶい黄褐色（10YR 7/4）。胎土：やや密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。飛鳥から奈良時代。（第6図-11、写真図版10-2-11）

土坑8

12土師器環C 口径：11.0cm（復元）。器高：1.9cm（残存）。厚さ：0.4cm。色調：外・内・断面は浅黄褐色（10YR 8/3）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。内外面はナデ調整を施している。飛鳥時代前期。（第6図-12、写真図版11-1-12）

13土師器碗 口径：10.4cm（復元）。器高：2.4cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内・断面は橙色（5YR 6/8）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。内外面はナデ調整、内面は暗文を施す。飛鳥時代前期。（第6図-13、写真図版11-1-13）

溝2

14須恵器器台 底径：30.8cm（復元）。器高：8.9cm（残存）。厚さ：0.4～0.7cm。色調：外面は青灰色（5PB 5/1）、内・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。回転ナデ調整。波状文。古墳時代中期前半。（第6図-14、写真図版10-2-14）

溝4

15土師器高環 口径：13.6cm（復元）。器高：4.9cm（残存）。厚さ：0.4～1.2cm。色調：外・内・面は淡黄褐色（5YR 8/3）、断面はぶい褐色（7.5YR 6/3）。胎土：粗。直径3mm以下の白・灰色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：1/2。古墳時代中期。（第6図-15、写真図版10-2-15）

井戸1

須恵器

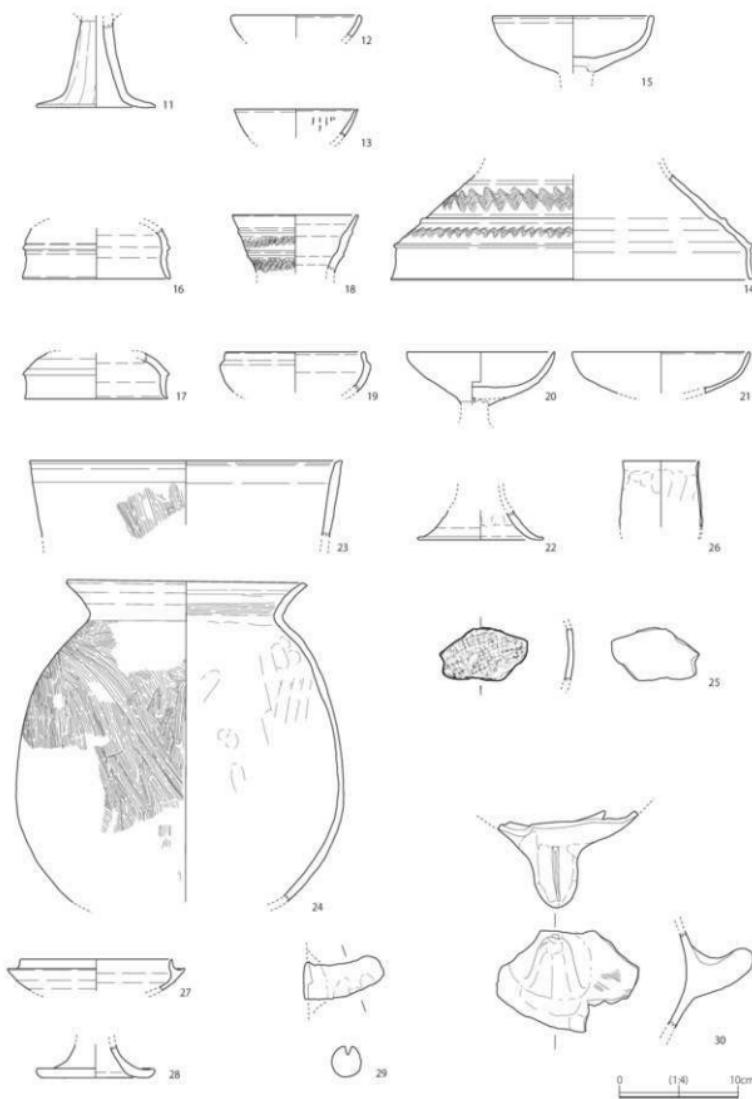
16环蓋 口径：12.4cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.2～0.3cm。色調：外・内・面は灰色（N 4/）。胎土：やや粗。直径4mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。TK216型式（I型式2段階）。（第6図-16、写真図版11-2-16）

17环蓋 口径：12.0cm（復元）。器高：3.9cm（残存）。厚さ：0.1～0.6cm。色調：外・内・断面は暗青灰色（5PB 4/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。TK208型式（I型式3段階）。（第6図-17、写真図版11-2-17）

18中型壺 口径：10.6cm（復元）。器高：4.9cm（残存）。厚さ：0.2～0.7cm。色調：外面は灰色（N 4/）、内面は灰色（N 5/）、断面は赤灰色（5R 5/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。内外面は回転ナデ調整を施している。外面は波状文を施す。TK73型式（I型式1段階）。（第6図-18、写真図版11-2-18）

土師器

19碗 口径：11.8cm（復元）。器高：3.4cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外面は橙色（5YR 6/8）、内・断面はぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：粗。直径2mm以下の白・赤色砂粒・雲母を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。内外面はヨコナデ調整。古墳時代中期前半から中葉。（第6図-19、写真図版11-2-19）



第6図 出土遺物（NN1999-2）

20高环 口径：12.5cm（復元）。器高：4.6cm（残存）。厚さ：0.2～1.6cm。色調：外・内・断面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや密。直径1mm以下の白・黒色砂粒・雲母を含む。焼成：良好。残存度：1/4。外面はナデ・ユビオサエ調整を施している。棒状刺突痕が残る。古墳時代中期前半から中葉。（第6図-20、写真図版11-2-20）

21高环 口径：15.0cm（復元）。器高：3.9cm（残存）。厚さ：0.1から0.5cm。色調：外・内・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：やや粗。直径1mm以下の白・赤色砂粒・雲母を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はナデ・ユビオサエ調整を施している。古墳時代中期前半から中葉。（第6図-21、写真図版11-2-21）

22高环脚部 底径：10.6cm（復元）。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：外・内・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：やや密。直径4mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はヨコナデ調整を施している。内面はヨコナデ・ナデ調整を施している。須恵器編年のTK73型式期併行とみられる。（第6図-22、写真図版11-2-22）

23瓶 口径：26.4（復元）cm。器高：6.5cm（残存）。厚さ：0.6cm。色調：外・内面は橙色（2.5YR 7/6）、断面は淡橙色（5YR 8/4）。胎土：やや粗。直径4mm以下の白・灰・赤色砂粒・雲母を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はハケメを施している。古墳時代中期。（第6図-23、写真図版11-2-23）

24甕 口径：19.8cm（復元）。器高：27.2cm（残存）。厚さ：0.4～0.7cm。色調：外・内・断面は橙色（5YR 7/6）。胎土：密。直径2mm以下の黒・白・灰色砂粒・雲母を含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、一部内面ヨコハケ調整。体部外面はハケメ調整、内面はナデ・ユビオサエ調整を施している。古墳時代中期前半。（第6図-24、写真図版11-2-24）

25韓式系土器甕 幅：7.4cm。器高：4.4cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：粗。直径2mm以下の白・赤色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。外面はタタキ調整。（第6図-25、写真図版11-2-25）

26製塙土器 口径：6.4cm（復元）。器高：5.6cm（残存）。厚さ：0.1～0.2cm。色調：外・断面は灰色（7.5YR 8/2）、内面は淡橙色（5YR 8/3）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。外面はユビオサエ調整、内面はヨコナデ調整。古墳時代のもの。（第6図-26、写真図版11-2-26）

2. 包含層出土遺物

須恵器

27环身 口径：12.8cm（復元）。器高：2.7cm（残存）。厚さ：0.3cm。色調：外・内・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。TK10型式MT85号窯段階（II型式3段階）である。（第6図-27、写真図版10-2-27）

土師器

28高环脚部 底径：10.0cm（復元）。器高：2.8cm（残存）。厚さ：0.4～0.8cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。（第6図-28、写真図版10-2-28）

29瓶把手 幅：6.8cm。器高：3.7cm（残存）。厚さ：2.5～2.6cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（5YR 8/3）。胎土：粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第6図-29、写真図版10-2-29）

30鍋把手 幅：11.9cm。器高：8.6cm（残存）。厚さ：0.5～0.7cm。色調：外・内・断面はにぶい橙色（7.5YR 7/3）。胎土：粗。直径4mm以下の白・灰色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第6図-30、写真図版10-2-30）

（古谷）

第5章 中野遺跡（N N1998-1）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区は、調査前には駐車場であった。駐車場とするために0.5~0.7mほど盛土されしており、その下層は約0.2mの耕土と約0.05~0.1mの床土が存在した。その下層は0.1~0.2mほど包含層が堆積していた。その下層は淡黄色の粘質土層で、地山であり、その上面が平安時代および古墳時代を中心とした遺構面であった。その下層には断而観察で調査地区ほぼ中央に北東から南西へ流れる旧河川が存在することを確認した（第8図）。

（村上・實盛）

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、古墳時代と平安時代を中心としたもので、掘立柱建物、溝、土坑、Pitであった（第7図、巻頭写真図版1-1、写真図版・5）。遺構面の標高は北端でT.P.+19.075m、南端でT.P.+19.125mであった。全ての遺構を同一遺構面で検出したが、これは各時代において土地の削平等が行われたためであろう。以下、遺物を掲載した主な遺構について遺構の種類ごとに詳述する。なお遺構の番号は、遺物を出土したもののみ、遺構の種類ごとの検出順に通し番号でつけた。

掘立柱建物 調査地区北寄りで検出した。2間×2間の建物で、北辺の中央および東端のPitは調査地区外であり、残り6基のPitを検出した。東西3.7m、南北4.9mで、柱間は東西約1.8m、南北約1.9~2.0mであった。Pitの掘形は東西0.7~0.8m、南北0.4~0.5mの隅丸方形で、検出標高はT.P.+19.132m~19.190m、Pit底はT.P.+18.685m~18.947m、深さは約0.2~0.5mであった。Pit23で須恵器環蓋（第9図-34）が、Pit20、22で製塙土器小片が出土し、古墳時代中期の遺構と考える。

溝1 調査地区北端で検出した。水滴状の平面形で、ほぼ底部は水平である。東端は調査地区外に延びるが、底部が浅くなる傾向があることから遺構の端近くとみられる。検出規模は長さ2.9m、西側の細い箇所の幅0.5m、東側の最大幅1.1m、深さは約0.4mである。標高は西側の細い箇所の上端がT.P.+19.077m、底部がT.P.+18.785mで、東端部分の上端はT.P.+19.163m、底部は最深部がT.P.+18.790m、東端でT.P.+19.062mであった。須恵器甕（第9図-36）などが出土した。

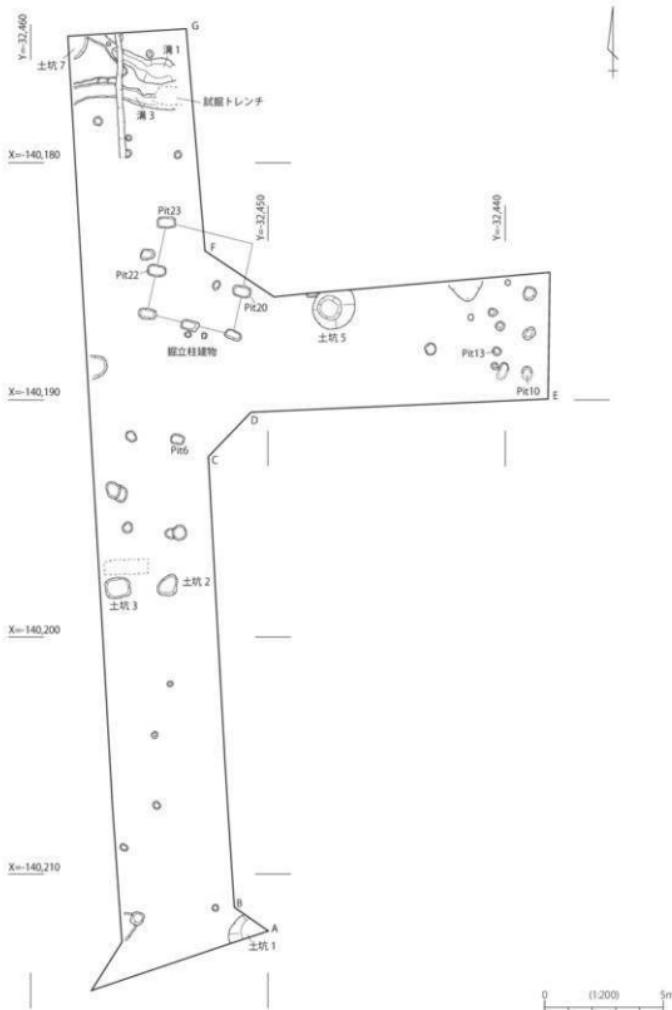
溝3 調査地区北端で検出した。西から東へと流れ、両端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ4.3m、幅0.6m、深さは約0.2mである。標高は西端部分の上端がT.P.+19.046m、底部がT.P.+18.977mで、東端部分の上端はT.P.+19.069m、底部はT.P.+18.872mであった。須恵器甕身、高环、土師器甕、高环（第9図-37~40）、製塙土器（写真図版12-1）などが出土し、古墳時代の遺構と考える。このうち土師器高环は試掘トレンチ出土のものと接合しており、同トレンチ出土の製塙土器（第9図-58）も本遺構に属する可能性が高い。

土坑1 調査地区南端で検出した。遺構東側の大半は調査地区外。検出規模は東西1.7m、南北1.0mで、深さは約0.7mである。上端の標高はT.P.+19.125m、下端はT.P.+18.468mであった。焼塙土器（第9図-41、42）などが出土し、平安時代の遺構と考える。

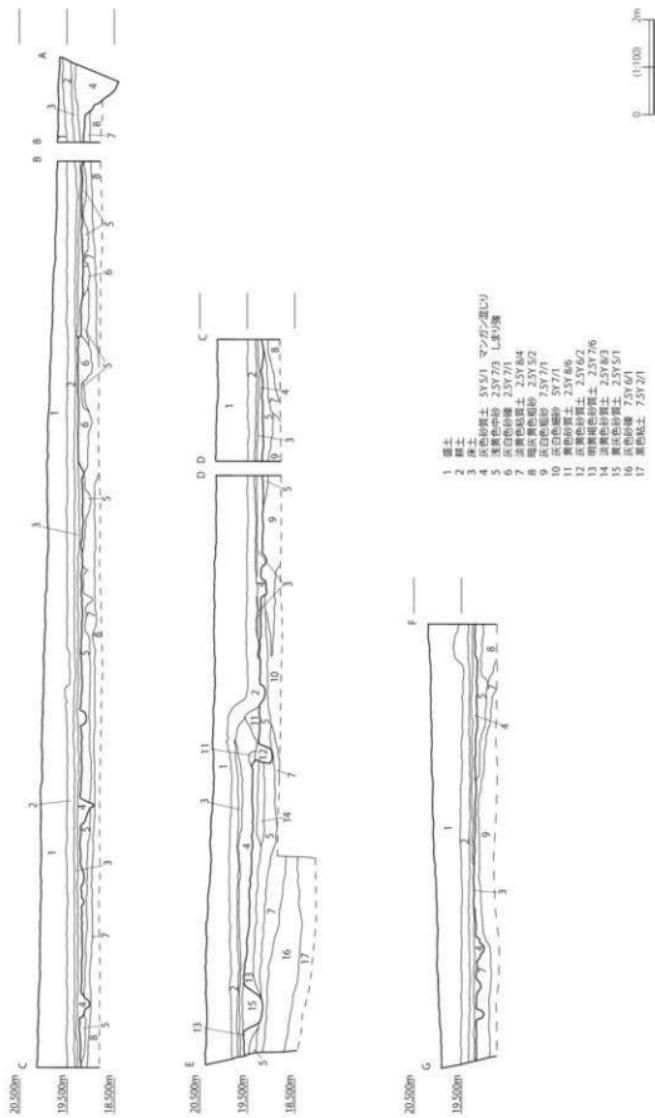
土坑2 調査地区南寄りで検出した。東西0.8m、南北0.8mの隅丸三角形状である。深さは約0.2mである。上端の標高はT.P.+19.125m、下端はT.P.+18.943mであった。土師器高环（第9図-43）などが出土した。

土坑3 調査地区南寄りで検出した。東西1.0m、南北0.9mの隅丸方形である。深さは約0.2mである。上端の標高はT.P.+19.060m、下端はT.P.+18.839mであった。土師器高环（第9図-44）、甕（第9図-45）などが出土した。平安時代の遺構と考える。

土坑5（井戸） 調査地区中央東寄りで検出した。遺構西側は別のPitによって切られ、北側は調査地区外である。掘形は直径1.8mの円形とみられ、深さは0.87mであり、中央西寄りに平面隅丸方形で一辺約1mの井戸枠設置箇所の段落ちがあった。上端の標高はT.P.+19.197m、下端はT.P.+



第7図 調査地区平面図 (N N1998-1)



第8図 調査地区断面図 (N1998-1)

18.327mで、段落ち上端はT.P.+18.817mであった。内部に井戸枠材の一部が残存していたが遺存状態が悪く取り上げられなかった。しかしその残存状況から、幅30cm程の縦板材を一辺に2枚ずつ組み合わせた方形縦板組枠井戸とみられる（写真図版5-1）。黒色土器碗（第9図-46、47）、土師器皿（第9図-48）、須恵器高环（第9図-49）などが出土した。平安時代の遺構と考える。

土坑7 調査地区北西端で検出した。遺構北と西の大半は調査地区外である。検出規模は東西0.8m、南北1.0m、深さ約0.4mである。上端の標高はT.P.+18.975m、下端はT.P.+18.583mであった。須恵器坏蓋（第9図-50）などが出土した。

Pit6 調査地区中央で検出した。東西0.6m、南北0.4mの隅丸方形で、深さ約0.4m。上端の標高はT.P.+19.167m、下端はT.P.+18.813m。土師器口縁部片（第9図-31）などが出土した。

Pit10 調査地区東端で検出した。直径0.4mの円形で、深さは約0.2mである。上端の標高はT.P.+19.578m、下端はT.P.+19.335m。須恵器坏蓋（第9図-32）などが出土した。古墳時代の遺構。

Pit13 調査地区東端で検出した。直径0.4mの円形である。深さは約0.3mである。上端の標高はT.P.+19.579m、下端はT.P.+19.262mであった。土師器皿（第9図-33）などが出土した。

（村上・實盛）

第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

Pit6

31口縁部片 幅：4.2cm（残存）。器高：3.9cm（残存）。厚さ：0.4～1.2cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：粗。直径1mm以下の雲母・白色・赤色・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はタタキ調整がなされる。一部色調が赤色になっている。内面はユビオサエ調整が施され、口縁端部にタテハケ調整がみられる。（第9図-31、写真図版12-1-31）

Pit10

須恵器

32坏蓋 口径：12.0cm（復元）。器高：2.6cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内面は青灰色（5PB 5/1）、断面は暗青灰色～暗赤灰色（5PB 5/1～5R 4/1）。胎土：密。径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。TK23型式（I型式4段階）。（第9図-32、写真図版12-1-32）

Pit13

土師器

33皿 口径：9.2cm。器高：1.3cm。厚さ：0.4cm。色調：外・内面は灰白色（10YR 8/2）、断面は灰白色（10YR7/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：1/10。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。（第9図-33、写真図版12-1-33）

Pit23

土師器

34甕 口径：12.2cm（復元）。器高：5.1cm（残存）。厚さ：0.3～0.9cm。色調：外・断面は橙色（5YR 7/8）、内面はにぶい橙色（5YR 7/4）。胎土：粗。直径4mm以下の白色砂粒・雲母を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面と内面はヨコナデ調整。外面はタテハケ調整、内面はナデ、ユビオサエ調整を施している。古墳時代の小型甕と思われる。（第9図-34、写真図版12-1-34）

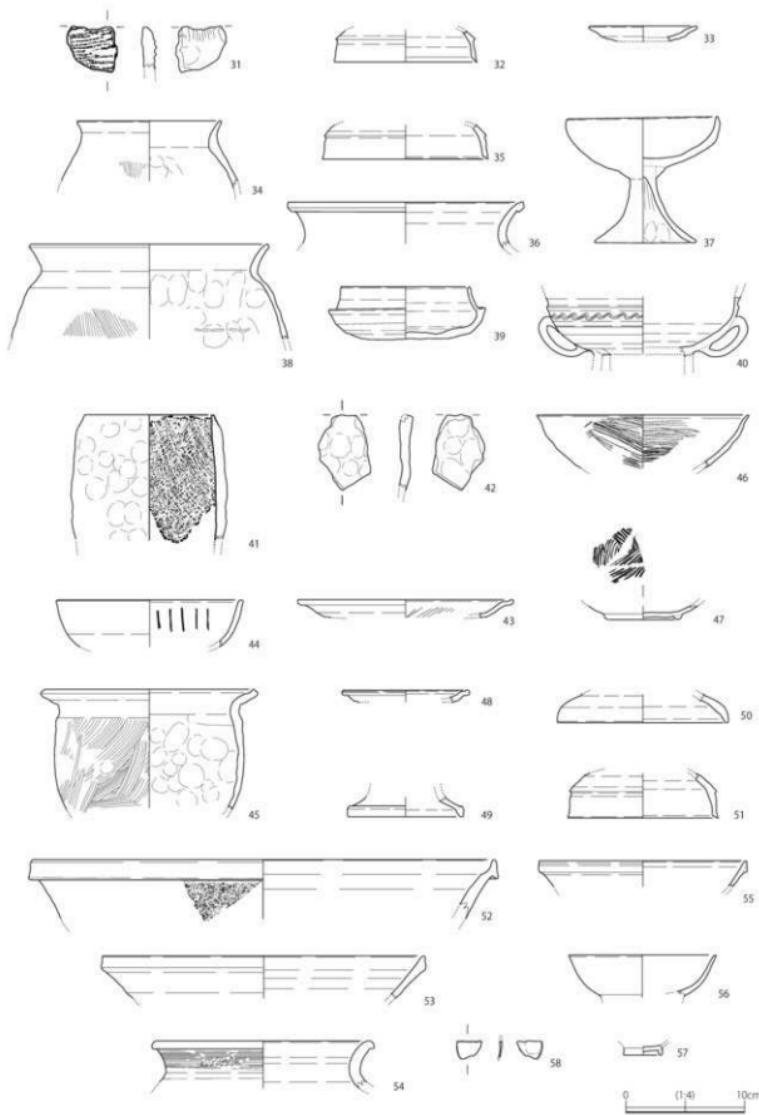
須恵器

35坏蓋 口径：14.0cm（復元）。器高：2.9cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内・断面は明青灰色（5PB 7/1）。胎土：やや粗。直径3mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。TK23型式（I型式4段階）である。（第9図-35、写真図版12-1-35）

溝1

須恵器

36甕 口径：9.8cm（復元）。器高：3.5cm（残存）。厚さ：0.6～0.8cm。色調：外面は明青灰色（5PB7/1）、内面は青灰色（5PB 6/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径2mm以下の黒色砂粒を含む。焼成：



第9図 出土遺物 (NN1998-1)

良好。残存度：小片。TK10型式（II型式2段階）。（第9図-36、写真図版12-1-36）

溝3

土師器

37高杯 底径：8.6~8.9cm。口径：12.6cm。器高：10.6cm。厚さ：0.4~0.7cm。色調：外・内面は橙色（5YR 7/8）、断面は淡橙色（5YR 7/3）。胎土：やや密。直径2mm以下の白色・黒色・赤色砂粒・雲母を含む。焼成：やや不良。残存度：ほぼ完形。外面はナデ調整。口縁はやや内湾する。脚部は「ハ」の字状に開く。「ハ」の字状に開く付近の内面にはユビオサエがみられる。脚部円形透孔が省略されており、小型化している。5世紀中葉の楕形高杯である。須恵器編年のTK216型式またはTK208型式期併行とみられる。試掘トレーンチ出土のものと接合。（第9図-37、写真図版12-2-37）

38甕 口径：20.2cm。（復元）。器高：8.0cm（残存）。厚さ：0.3~0.6cm。色調：外面はにぶい橙色（5YR 7/4）、内面は浅黄橙色（7.5YR 7/4）。断面は褐白色。胎土：やや密。径3mm以下の白色砂粒と雲母を少量含む。焼成：不良。残存度：1/4。口縁部外面と口縁端部内面はヨコナデ調整。外面はタテハケ調整、内面はユビオサエ調整。5世紀中葉～後葉。（第9図-38、写真図版12-2-38）

須恵器

39杯蓋 口径：10.8cm。器高：4.5cm。厚さ：0.3~0.7cm。色調：外面は青灰色（5B 6/1）、内・断面は青灰色（5PB 6/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。TK208型式（I型式3段階）である。（第9図-39、写真図版12-2-39）

40高杯 胸部径：16.4cm（復元）。器高：5.0cm（残存）。厚さ：0.3~0.7cm。色調：外面は明青灰色（5PB 7/1）、内・断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はナデ調整で、下部はケズリ調整。波状文を施し、その下部に把手がつく。4方向以上に透孔がある。TK216型式（I型式3段階）。（第9図-40、写真図版12-2-40）

土坑1

41焼塩土器 口径：10.9cm（復元）。器高：10.6cm（残存）。厚さ：0.4~1.0cm。色調：外面は橙色（7.5YR 6/6）、内・断面は灰色（7.5YR 6/1）。胎土：粗。径4mm以下の白色砂粒含む。焼成：不良。残存度：1/5。外面ユビオサエ調整。内面に布目。瀬戸内西部地域を中心に分布する「六連式土器」（小野1961）。煮沸し結晶化した塩に、さらに熱を加えることで不純物を取り除く焼塩工程専用の土器（岩本・大久保2007）。奈良時代～平安時代前葉。（第9図-41、写真図版12-1・2-41）

42焼塩土器 幅：4.4cm（残存）。器高：6.4cm（残存）。厚さ：0.6~1.0cm。色調：外・内面は橙色（7.5YR 6/8）、断面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：粗。直径3mm以下の白色・赤色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。内外面ユビオサエ。奈良～平安時代前葉。（第9図-42、写真図版12-2-42）

土坑2

土師器

43高杯A 口径：18.2cm（復元）。器高：1.5cm（残存）。厚さ：0.4cm。色調：外・内面は橙色（5YR 7/8）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。胎土：密。径3mm以下の白色砂粒・雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。内外面ナデ調整。内面に暗文。8世紀前半。（第9図-43、写真図版12-1-43）

土坑3

土師器

44碗 口径：15.8cm（復元）。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.4~0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/6）。胎土：粗。直径2mm以下の白・灰色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。内外面はナデ調整。内面は暗文がみられる。8世紀代。（第9図-44、写真図版12-1-44）

45甕 口径：18.4cm。（復元）。器高：10.2cm（残存）。厚さ：0.4~0.8cm。色調：外・内・断面は橙色（5YR 6/6）。胎土：やや粗。直径2mm以下の白色・灰色砂粒と雲母を含む。焼成：良好。残存度：1/6。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。外面はハケ調整、内面はユビオサエ調整を施している。8世紀後半～9世紀前半のものと思われる。（第9図-45、写真図版12-1-45）

土坑5

黒色土器

46碗 口径：17.8cm（復元）。器高：4.5cm（残存）。厚さ：0.4~0.5cm。色調：外・内・断面は暗

灰色（N 3/）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。B類碗。内外面はヘラミガキ調整。畿内系V類の11世紀代と思われる。（第9図-46、写真図版12-1-46）

47碗 高台径：6.6cm（復元）。器高：1.2cm（残存）。高台高：0.5cm。厚さ：0.4cm。色調：外・内面は暗灰色（N 3/）、断面は暗灰色（N 4/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒・雲母を含む。焼成：良好。残存度：小片。B類碗。（第9図-47、写真図版12-1-47）

土師器

48皿 口径：10.8cm（復元）。器高：1.0cm（残高）。厚さ：0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。胎土：密。直径1mm以下の黒色砂粒・雲母を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。「て」字状口縁でBタイプのもので11世紀のものと思われる。（第9図-48、写真図版12-1-48）

須恵器

49高环 高环底径：9.8cm。（復元）器高：1.7cm（残高）。厚さ：0.3~0.6cm。色調：外・内・断面は明青灰色（5PB 7/1）。胎土：密。直径2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。6世紀のものと思われる。（第9図-49、写真図版12-1-49）

土坑7

須恵器

50环H蓋 口径：14.4cm（復元）。器高：2.4cm。厚さ：0.5~0.7cm。色調：外・内・断面は明青灰色（5PB 7/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色・黒色・灰色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。环H蓋。7世紀前半のものと思われる。（第9図-50、写真図版12-1-50）

2. 包含層出土遺物

51須恵器环蓋 口径：12.6cm（復元）。器高：3.7cm（残存）。厚さ：0.3~0.7cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB 6/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。TK23型式（I型式4段階）である。（第9図-51、写真図版13-1-51）

52須恵器台 口径：29.8cm。（復元）器高：5.0cm（残存）。厚さ：0.6~1.0cm。色調：外面は明青灰色（5PB 7/1）、内・断面は青灰色（5PB 6/1）。胎土：密。直径2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。外面の波状文は著しく細かくかつ薄い。5世紀後半~6世紀代。（第9図-52、写真図版13-1-52）

53東播系須恵器練鉢 口径：27.2cm。（復元）器高：3.6cm（残存）。厚さ：0.4~0.8cm。色調：外・内・断面は灰白色（N 7/）。胎土：やや密。直径2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面ともにヨコナデ調整。12世紀末葉~13世紀初頭。（第9図-53、写真図版13-1-53）

54須恵器甕 口径：18.8cm。（復元）器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.8~1.0cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB 6/1）。胎土：密。直径2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施し、外面にはタタキ調整後力キ目が施されている。MT85型式（II-3段階）である。（第9図-54、写真図版13-1-54）

55白磁碗 口径：17.4cm。（復元）器高：2.2cm（残存）。厚さ：0.3cm。色調：外・内面は灰白色（10Y 8/2）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。12世紀代のものと思われる。（第9図-55、写真図版13-1-55）

56磁器碗 口径：12.4cm。（復元）器高：3.6cm（残存）。厚さ：0.3~0.5cm。色調：外面は灰白色（10Y 8/2）、内・断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。近世以降のものと思われる。（第9図-56、写真図版13-1-56）

57陶器高台 高台径：3.3cm（復元）。器高：0.8cm（残存）。高台高：0.6cm。厚さ：0.3cm。色調：外・断面は灰白色（5Y 8/1）、内面は灰白色（10Y 8/1）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。（第9図-57、写真図版13-1-57）

58製塙土器 幅：2.1cm（残存）。器高：1.5cm（残存）。厚さ：0.1~0.2cm。色調：外・断面は浅黄橙色（10YR 8/4）、内面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：粗。1mm以下の赤色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。試掘トレンチ5出土。（第9図-58、写真図版13-1-58）

（古谷）

第6章 中野遺跡（N N1997-1）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区は、調査前には宅地であった。宅地とするために0.5~0.7mほど盛土されており、その下層は部分的に耕土と、厚さ約0.15mの床土が存在した。その下層は0.2~0.3mほど灰白色系の遺物包含層が堆積していた。その下層は灰黄褐色土層で、その上面が平安時代を中心とした遺構面であった。その下層は部分的に灰白色シルト層が堆積しており、その下面で地山層を検出したが、遺構等の検出はなかった（第10図）。（村上・實盛）

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、主に平安時代のもので、井戸、溝、Pitであった（第10図、写真図版6）。遺構面の標高は北東端でT.P.+20.400m、北西端でT.P.+20.355m、南東端でT.P.+20.377m、南西端でT.P.+20.321mであった。遺構番号は、種類ごとの検出順に通し番号でつけた。

井戸1 調査地区北寄りで検出した。東西1.3m、南北1.4mのいびつな円形である。深さは約0.5mである。上端の標高はT.P.+20.367m、下端はT.P.+19.893mであった。井戸枠等は検出せず、素掘りの井戸であったか、再利用のために廃絶時に井戸枠を抜き取ったものとみられる。土師器碗、皿（第10図-60、61）、平瓦（第10図-62、63）などが出土し、平安時代の遺構と考える。

溝1 調査地区東端で検出した。北西から南東へと流れ、北端は井戸1に切られ、南端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ1.8m、幅0.3m、深さは約0.1m。標高は北端部分の上端がT.P.+20.359m、底部がT.P.+20.300m。南端部分の上端はT.P.+20.378m、底部はT.P.+20.291m。須恵器環身（第10図-59）等が出土したが、切り合関係等から井戸1、Pit 1と同様に平安時代とみられる。

溝2 調査地区東端で検出した。北西から南東へと流れ、北端は井戸1に切られ、南端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ4.0m、幅0.3m、深さは約0.1mである。標高は北端部分の上端がT.P.+20.361m、底部がT.P.+20.335mで、南端部分の上端はT.P.+20.368m、底部はT.P.+20.320mであった。出土遺物は土師器、須恵器の小片で、時期は井戸1、Pit 1と同様平安時代とみられる。

溝3 調査地区西端で検出。北西から南東へと流れ、両端は調査地区外に延びる。検出規模は長さ1.5m、幅0.2m、深さは約0.1m。標高は北端部分の上端がT.P.+20.281m、底部がT.P.+20.245m。南端部分の上端はT.P.+20.268m、底部はT.P.+20.218m。出土遺物は土師器、須恵器の小片。

Pit1 調査地区東端で検出した。遺構東半は溝2により切られる。直径0.4mの円形であったとみられる。深さは約0.1mである。上端の標高はT.P.+20.374m、下端はT.P.+20.234mであった。土師器皿小片が出土しており、井戸1と同様に平安時代の遺構と考える。（村上・實盛）

第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

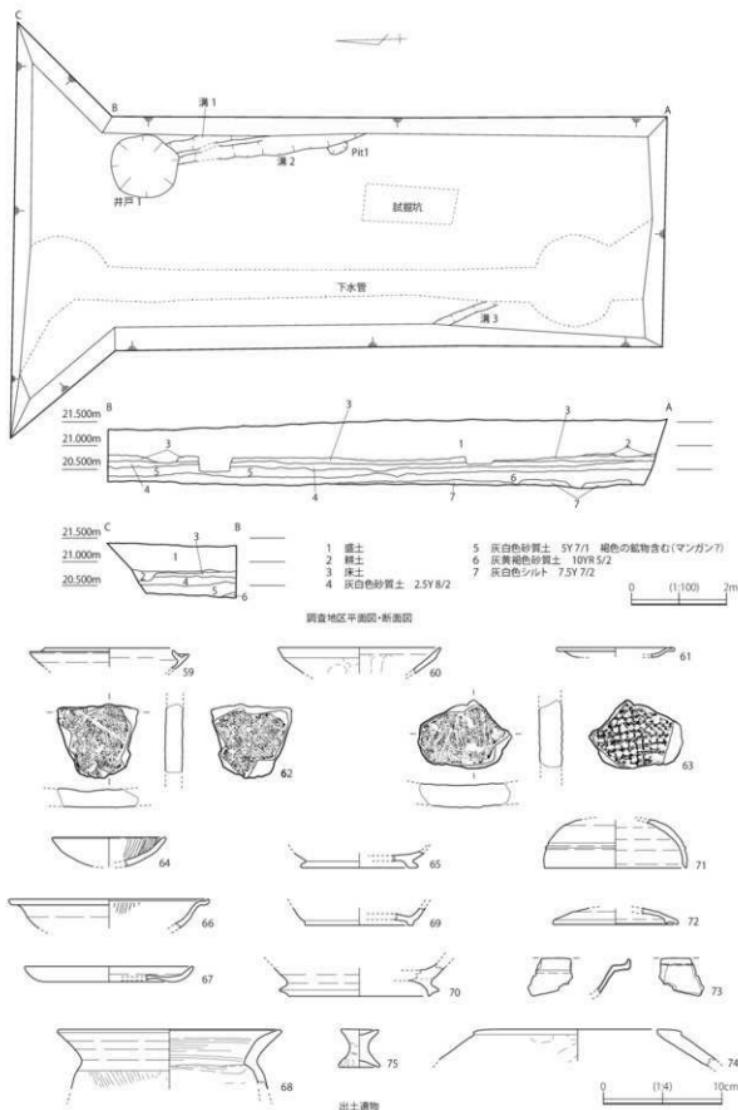
溝1

59須恵器環身 口径：11.0cm（復元）。器高：1.6cm（残存）。厚さ：0.3~0.4cm。色調：外・内・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径1mm程度の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。TK217型式（II型式6段階）である。（第10図-59、写真図版13-2-59）

井戸1

60土師器碗 口径：13.8cm（復元）。器高：2.2cm（残存）。厚さ：0.3~0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はナデ調整。外面はユビオサエ。碗A。10世紀。（第10図-60、写真図版13-2-60）

61土師器皿 口径：10.0cm（復元）。器高：0.8cm（残存）。厚さ：0.3~0.4cm。色調：外面は橙色（YR6/6）、



第10図 調査地区平面図・断面図・出土遺物 (N N1997-1)

内・断面にはぶい橙色（5YR 6/4）。胎土：やや粗。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。「て」字状口縁でBaタイプ。10世紀末～11世紀初。（第10図-61、写真図版13-2-61）

62平瓦 横幅：6.9cm（残存）。縦幅：6.3cm（残存）。厚さ：1.4～1.5cm。色調：外・内・断面は灰色（N 5/0）。胎土：粗。直径4mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。表面に布目痕。裏面には繩目タタキが施されるが不明瞭。（第10図-62、写真図版13-2-62）

63平瓦 横幅：6.9cm（残存）。縦幅：5.8cm（残存）。厚さ：1.8～1.9cm。色調：外・内・断面は灰白色（7.5Y 7/1）。胎土：粗。直径3mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。表面に布目痕があり、裏面は格子目タタキが施される。（第10図-63、写真図版13-2-63）

2. 包含層出土遺物

64土師器环 口径：9.6cm（復元）。器高：2.4cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面は灰白色（7.5YR 8/1）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/8。环C。飛鳥時代。（第10図-64、写真図版13-2-64）

65土師器环 底部径：10.0cm（復元）。器高：1.4cm（残存）。厚さ：0.3～0.8cm。色調：外・内・断面は橙色（5YR 6/8）。胎土：やや粗。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。环B。奈良時代中頃。（第10図-65、写真図版13-2-65）

66土師器高环 口径：17.0cm（復元）。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内面は橙色（5YR 7/6）、断面は灰白色（5YR 8/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。高环A。8世紀前半。（第10図-66、写真図版13-2-66）

67土師器皿 口径：14.2cm（復元）。器高：1.3cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外面はぶい黄橙色（10YR 7/3）、内・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。ヨコナデ調整。中世のもの。（第10図-67、写真図版13-2-67）

68土師器甕 口径：19.0cm（復元）。器高：5.1cm（残存）。厚さ：0.4～1.0cm。色調：外・内・断面は灰黄褐色（10YR 6/2）。胎土：密。直径1mm以下の白・灰色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁外面はナデ調整、内面はヨカヘケ調整を施す。体部外面はタテハケ調整。口縁断面がやや肥厚する。7世紀前半（飛鳥時代中頃）。（第10図-68、写真図版13-2-68）

69須恵器环 底部径：9.2cm（復元）。器高：1.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面は灰色（N 7/0）。胎土：密。直径2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。环B。TK7型式（IV型式3段階）である。（第10図-69、写真図版13-2-69）

70須恵器付壺 底部径：11.8cm（復元）。器高：2.8cm（残存）。厚さ：0.5～1.0cm。色調：外・内・断面は灰色（N 7/0）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。环B。MT21型式（IV型式2段階）である。（第10図-70、写真図版13-2-70）

71須恵器环蓋 口径：12.0cm。器高：4.1cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は灰色（N 6/0）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。TK43型式（II型式4段階）である。（第10図-71、写真図版13-2-71）

72須恵器环蓋 口径：10.6cm。器高：1.4cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は灰色（N 6/0）。胎土：やや粗。直径3mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/10。TK217型式（III型式1段階）である。（第10図-72、写真図版13-2-72）

73輸入磁器青磁盤 幅：3.7cm。器高：3.0cm（残存）。厚さ：0.4～0.6cm。色調：外・内面は明緑灰白色（10GY 7/1）、断面は灰白色（N 8/0）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。（第10図-73、写真図版13-2-73）

74竈 口径：17.6cm（復元）。器高：3.2cm（残存）。厚さ：0.8～1.3cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒含む。焼成：良好。残存度：小片。（第10図-74、写真図版13-2-74）

75高环状土製品 最大径：3.5cm。器高：3.2cm。厚さ：0.5cm。色調：外・内・断面はぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒含む。焼成：良い。残存度：ほぼ完形。市内の城遺跡等で類例が出土（村上2006）。古墳時代。（第10図-75、写真図版13-2-75）
(古谷)

第7章 中野遺跡（墓ノ堂古墳）調査の成果

第1節 航空レーザ測量調査

1. 調査の経過

墓ノ堂古墳は、古くからその存在が知られ、昭和17年撮影の航空写真等を用い墳形等が検討されたことがあったが（野島2009）、現在墓地となっていることもあり、これまで詳細な測量図を作成したことにはなかった。

平成28年度に、四條畷市では大東市とともに飯盛城跡の保存活用を推し進めるため、城跡の三次元航空レーザ計測を実施することとなり、平成28（2016）年7月1日にアジア航測株式会社によりロビンソン・ヘリコプター製R44 II航空機を用い、Trimble社製レーザ計測機材Harrier56を使用して1.0m×1.0mメッシュあたり10点以上の精度で航空レーザ計測を行った。

その後の整理過程で計測範囲に墓ノ堂古墳の墳丘が含まれていることが判明したため、墓ノ堂古墳周辺について計画線1m、主曲線20cmで測量図の作成を行った。また、航空レーザ計測の成果を用い、赤色立体地図の作成を行った。

なお、古墳の名称は「墓の堂古墳」とする文献もあるが、現在の埋蔵文化財包蔵地名である「墓ノ堂古墳」を採用し報告する。

（實盛）

2. 墳丘および周辺の現状（巻頭写真図版2-1、写真図版8-2・9-1・2）

墓ノ堂古墳は、後円部を南西方向に、前方部を北東方向に振る前方後円墳である。現在、墳丘上および周溝の一部は共同墓地となっている。共同墓地の利用は古く、地域住民によれば近代まで土葬が続けられていたといふ。アメリカ軍の撮影による昭和23年の写真によれば墳丘上は樹木である程度おおわれていたようであるが、昭和45年ごろには2本程度であり、現状では樹木はみられない。共同墓地として墓地の区画割が行なわれ、通路にはコンクリートが敷かれているが、前方部および後円部の高まりは現状でもある程度確認できる。くびれ部付近の墳丘上には石造十三仏塔2基、石造六地蔵などが覆い屋を作り建っており、十三仏のうち1基に天文24（1555）年、石造六地蔵に宝永2（1705）年の銘があり、共同墓地利用の古さを物語る。墳丘の北側と南側には住宅および送電鉄塔等が、東側には工場等が建っており、墳丘西側には東高野街道が北東方向から南西方向へ通っている。

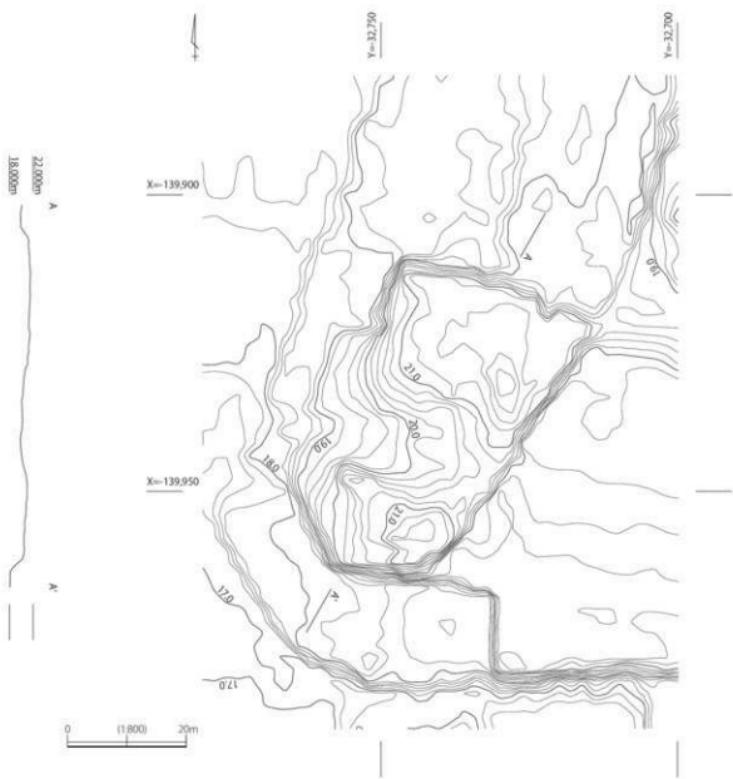
（實盛・古谷）

3. 調査成果（第11図、巻頭写真図版2-2）

現状の墳丘は後円部が最高地点をT.P.+21.4mとし、墳丘裾ラインはT.P.+18.2~18.4mである。前方部は最高地点をT.P.+21.8mとし、墳丘裾ラインはT.P.+19.0~20.4mであった。コンターラインが急激に密となる墳丘の北側、東側、南側は、現況ではブロック塀が設置されており墳丘の一部が削平されている可能性が高い。くびれ部付近の西側には共同墓地へと入る通路が設置されており、削平が著しく本来の墳形をとどめない。その北側の張り出しあは墓地の区画が造成されており、墳丘由来ではないとみられるが、その位置から判断すると造り出しが存在したものを利用して拡張造成している可能性も考えられる。

現存の墳丘長は59.0m、前方部幅36.0m、前方部の残存高2.8m、後円部の残存高3.2mであった。野島稔が明らかにした昭和17年当時の墳丘長が62mであり（野島2009）、さらに3mほど墳丘が削られている可能性がある。築造時の規模は第9章で考察する通り墳長約70m、後円部径47.3m、くびれ部幅約34m、前方部長22.7m、前方部幅約58mの前方後円墳で、周堤と周溝を伴い、両者を含めた兆域の全長約98m、最大幅約101mに復元できる。

（實盛・古谷）



第11図 墓ノ堂古墳 墳丘測量図・断面図

第2節 1995年立会調査

1. 調査の経過

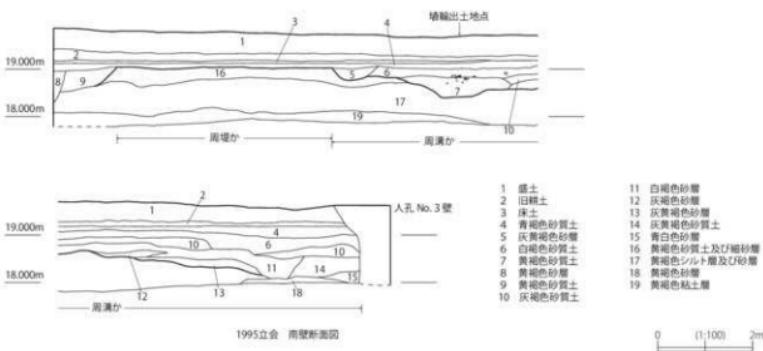
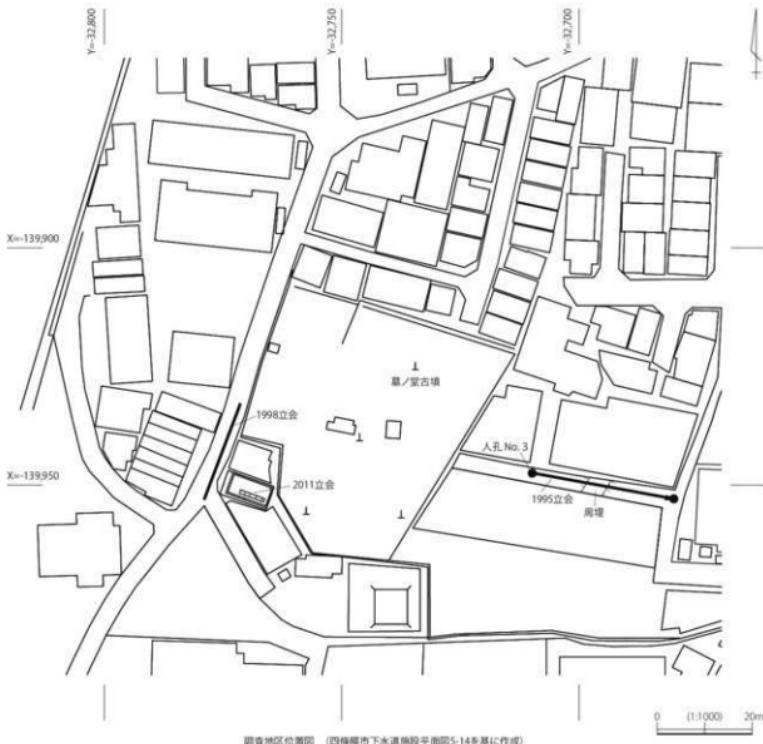
平成7年度の立会調査については、四條畷市中野一丁目3において公共下水道建設が計画され、関係各課で協議を行い、平成7（1995）年9月26日に四條畷市下水道課立会いのもと計画用地内に3か所のトレーニングを設定し確認調査を実施したところ、墓ノ堂古墳に属するとみられる埴輪片が出土した。その結果をもってさらに協議を行い、下水道工事時に立会調査を行うこととなった。

同年10月11・12日に立会調査を行った結果、埴輪片が多数出土したため、出土箇所を中心に断面図の作成を行った。

（實盛）

2. 検出遺構

今回の立会調査地区は旧耕土より上層に0.4mほど盛土されていた。その下層に約0.1~0.2mの旧



第12図 調査地区位置図・断面図 (墓ノ堂古墳1995・1998・2011立会)

耕土と一部に約0.05mの床土があり、昭和23年の写真で明らかなように以前は水田地であった（写真図版9）。その下層に約0.1～0.2mほどの青褐色砂質土が堆積し、その下面が遺構面であった。調査は埴輪片の回収と断面図の記録に注力したもので、その内容の検討は断面記録を基に行った。断面で確認できた遺構は墓ノ堂古墳の周堤および周溝である（第12図、写真図版7）。

周堤 断面に記録される人孔No.3の壁から東に11.3mの位置で西への落ち込みを確認した。また、そこからさらに東へ4.5mの位置でも東への落ち込みを確認した。このことから、断面図第16層を基盤層とした現存の頂部幅4.5m、基底部幅約8m、周溝底からの残存高約1m以上の周堤遺構と判断した。第16層は周堤盛土の可能性がある。第5層は後世の遺構であり、実際の残存頂部幅はさらに広い可能性がある。

周溝 上記の周堤より西側の落ち込みを周溝と判断した。検出できた幅は11.3m以上、深さは周堤の残存頂部から約1m以上である。検出幅が広いのは埴丘のくびれ部付近にあたっているためとみられる。周溝が灰褐色系の砂層により埋没が進んだ段階で周溝内の周堤付近にのみ堆積した崩落土とみられる第7層から多くの埴輪片が出土した（第12～15図）。このことから、これらの埴輪片は周堤上に立てられていたものである可能性が高い。

（寅盛・古谷）

3. 出土遺物

76円筒埴輪 腸径（最大）：35.4cm（復元）。器高：9.5cm（残存）。厚さ：1.1～1.2cm。色調：外・内面は橙色（7.5YR 7/6）、断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや密。直径4mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。外面はタテハケ調整、内面はユビナデとユビオサエ調整が施されている。突帯の高さは1cmでおおむね水平に巡らされている。（第13図-76、写真図版14-1・2-76）

77円筒埴輪 腸径（最大）：33.8cm（復元）。器高：8.7cm（残存）。厚さ：1.0～1.5cm。色調：外面は浅黄橙色（7.5YR 8/6）、内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：やや粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。外面はタテハケ調整、内面はナナメ方向のナデ調整が施されている。突帯の高さは1.1cmでおおむね水平に巡らされている。（第13図-77、写真図版14-1・2-77）

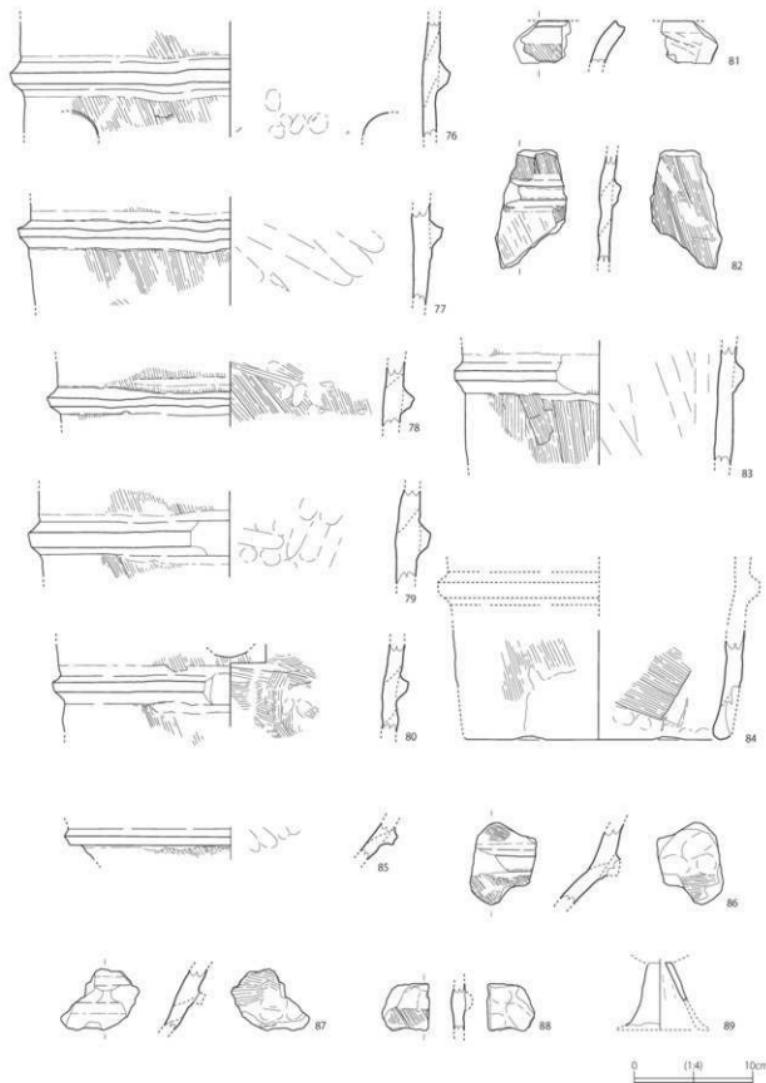
78円筒埴輪 腸径（最大）：29.4cm（復元）。器高：5.4cm（残存）。厚さ：1.5cm。色調：外面は浅黄橙色（7.5YR 8/6）、内・断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：やや粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。外面はタテハケ調整、内面はタテハケ調整とユビオサエ調整が施されている。突帯の高さは1.0cmでおおむね水平に巡らされている。突帯より上辺に突帯貼り付けに伴う痕跡がみられる。77・78は同一個体の可能性がある。（第13図-78、写真図版14-1・2-78）

79円筒埴輪 腸径（最大）：32.2cm（復元）。器高：7.3cm（残存）。厚さ：1.4～1.8cm。色調：外・内面は橙色（7.5YR 7/6）、断面は灰白色（10YR8/2）。胎土：やや粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。外面はタテハケ調整、内面はユビナデとユビオサエ調整が施されている。突帯の高さは0.9cmでおおむね水平に巡らされている。突帯剥離部分で突帯設定技法はみられない。（第13図-79、写真図版14-1・2-79）

80円筒埴輪 腸径（最大）：29.4cm（復元）。器高：7.4cm（残存）。厚さ：1.2～1.3cm。色調：外・内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面は灰白色（7.5YR8/1）。胎土：やや粗。直径5mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。外面はタテハケ調整、内面はタテ・ヨコハケとユビオサエ調整が施されている。突帯の高さは0.9cmでおおむね水平に巡らされている。突帯剥離部分で突帯設定技法はみられない。（第13図-80、写真図版14-1・2-80）

81円筒埴輪 腸径（最大）：34.8cm（復元）。器高：16.7cm（残存）。厚さ：0.9～1.3cm。色調：外・内・断面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径2mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整が施されている。突帯の高さは0.7cmでおおむね水平に巡らされている。（第13図-81、写真図版14-1・2-81）

82円筒埴輪 腸径（最大）：34.8cm（復元）。器高：16.7cm（残存）。厚さ：0.9～1.3cm。色調：外・内・断面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径2mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。外面はタテハケ調整、内面はタテハケ調整が施されている。突帯の高さは0.7cmでおおむね水平に巡ら



第13図 出土遺物（墓ノ堂古墳1995円筒埴輪・1998・2011）

されている。(第13図-82、写真図版14-1・2-82)

83円筒埴輪 腹径(最大)：23.2cm(復元)。器高：10.1cm(残存)。厚さ：1.2～1.5cm。色調：外・断面は淡橙色(5YR 8/4)、内面は橙色(5YR 7/6)。胎土：やや密。直径2mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のナデ調整が施されている。突帯の高さは0.9cmでおおむね水平に巡らされている。突帯剥離部分で突帯設定技法はみられない。(第13図-83、写真図版14-1・2-83)

90人物埴輪 器高：12.4cm(残高)。幅：3.4～6.5cm。色調：外・内面は浅黄橙色(7.5YR 8/4)、断面は褐灰色(10YR 6/1)・浅黄橙色(10YR 8/4)。胎土：やや粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。人物埴輪の肩部から手先部分。外面はナデ・ユビオサエ調整。腕部は中空である。左手をあげ手綱をとる仕草をする馬鹿形人物埴輪である(辻川2019)。(第14図-90、写真図版15-1・2-90)

91武人埴輪 器高：6.3cm(残高)。幅：6.8～10.0cm。厚さ：0.8～1.8cm。色調：外・内面は浅黄橙色(7.5YR 8/2)、断面は灰白色(10YR 8/2)。胎土：やや粗。直径5mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。外面はタテハケ・ナデ調整。(第14図-91、写真図版15-1・2-91)

92家形埴輪 長さ：5.9cm(残存)。幅：9.9cm厚さ：1.4～2.3cm。色調：色調：外面は浅黄橙色(7.5YR 8/4)、内面は浅黄橙色(10YR 8/3)、断面は灰白色(10YR 8/1)。胎土：やや密。直径4mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。外面はユビオサエとナデ調整が施されている。内面はユビオサエとナデ調整が施され、一部工具と思われる痕が残る。家形埴輪の屋根部と思われる、壁部から屋根部分まで一括で成形し、軒部分を付け足す一括成形Bにあたる(青柳2020)。(第14図-92、写真図版16-1・2-92)

93大刀形埴輪 長さ：7.5cm(残存)。幅：7.2cm(残存)。厚さ：3.8～4.6cm。色調：表・裏・断面は橙色(5Y 7/6)。胎土：やや粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。大刀形埴輪の勾革部分である。内外側面ともにナデ調整を施す。外面は勾金を表現した粘土粒を貼り付ける。その外側に1条の沈線を施す。内面は勾革部分と楔形把頭を支持する粘土を附加する。(第14図-93、写真図版16-1・2-93)

94器財埴輪 長さ：21.2cm(残存)。幅：6.9cm(残存)。色調：外・断面は橙色(5Y 7/6)、内面は橙色(2.5YR 7/8)。胎土：粗。直径5mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。表・裏面はナデ調整を施されている。円筒部及び形象部の表裏面ともにナデ調整が施される。石見型埴輪などの器財埴輪の円筒部から形象部にあたる。(第14図-94、写真図版16-1・2-94)

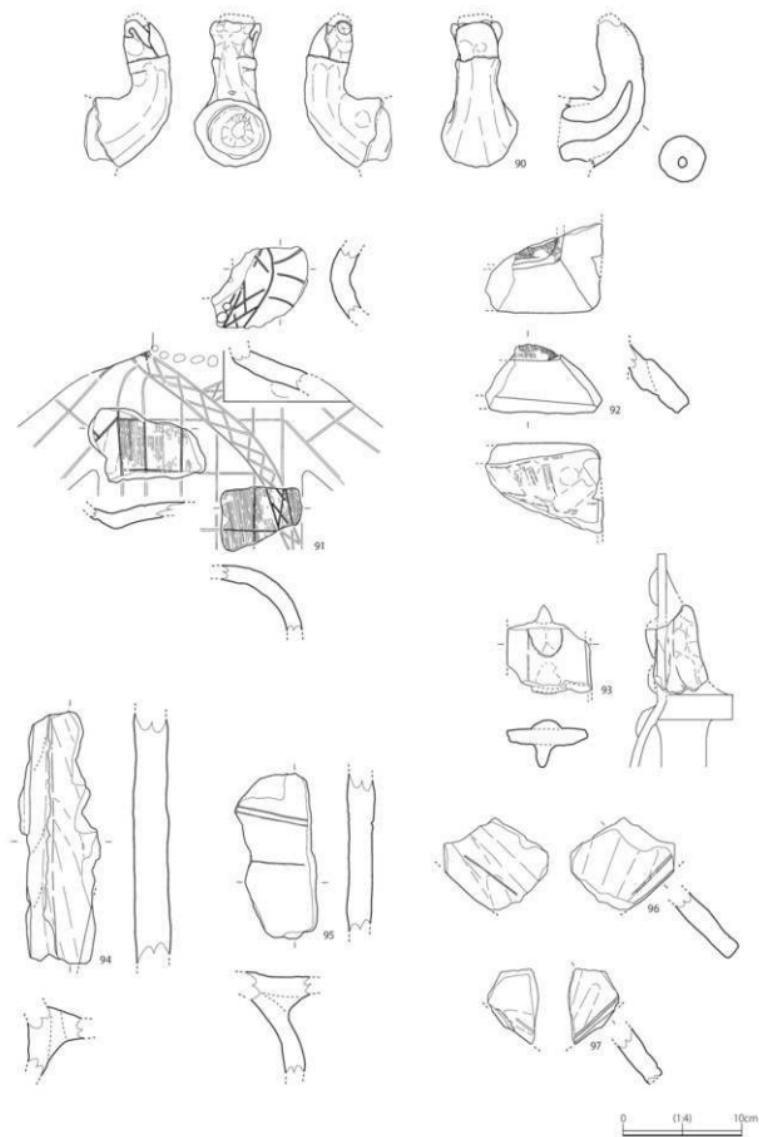
95器財埴輪 長さ：14.0cm(残存)。幅：7.0cm(残存)。色調：外・内面は橙色(2.5Y 7/8)、断面は橙色(2.5YR 8/1)。胎土：粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。円筒部表面はタテハケ調整、裏面はナデ調整を施されている。形象部表面には1条及び2条の線刻がみられる。石見型埴輪などの器財埴輪の円筒部から形象部にあたる。(第14図-95、写真図版16-1・2-95)

96蓋形埴輪 長さ：7.8cm(残存)。幅：8.8cm(残存)。厚さ：1.5～1.8cm。色調：色調：表・裏・断面は橙色(5Y 7/6)。胎土：粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。表・裏面はナデ調整が施されている。両面ともに線刻がみられ、片面は不明瞭で表裏をあらわしている。蓋形埴輪の立脚部と思われる。(第14図-96、写真図版16-1・2-96)

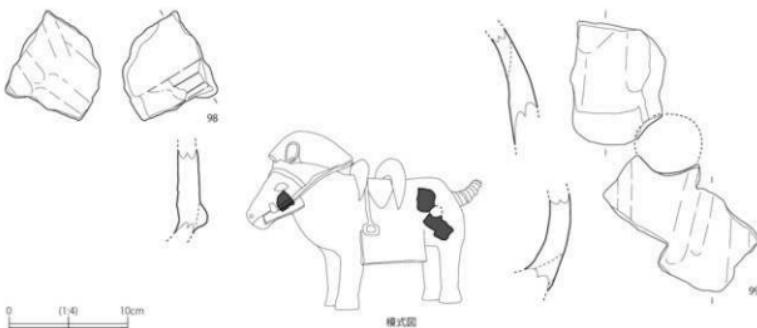
97蓋形埴輪 長さ：6.4cm(残存)。幅：4.3cm(残存)。厚さ：1.4～1.8cm。色調：色調：表・裏・断面は橙色(5Y 7/8)。胎土：粗。直径3mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。表・裏面はナデ調整が施されている。両面ともに線刻がみられ、片面は不明瞭で表裏をあらわしている。蓋形埴輪の立脚部と思われる。(第14図-97、写真図版16-1・2-97)

98馬形埴輪 長さ：9.2cm(残存)。幅：8.0cm(残存)。厚さ：1.6～1.8cm。色調：表面は浅黄橙色(10YR 8/3)、裏面はぶい黄橙色(10YR 7/4)、断面は褐灰色(10Y 6/1)。胎土：粗。直径2mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。表面には粘土紐が貼り付けられ、裏面はナデ調整が施されている。馬形埴輪の頭部と思われる。(第15図-98、写真図版15-1・2-98)

99馬形埴輪 長さ：5.0cm(残存)。幅：5.8cm(残存)。厚さ：1.3～1.7cm。色調：表・裏面は橙色(5YR 7/6)、断面は黄灰色(2.5Y 4/1)である。胎土：やや密。直径3mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。表面にはナデ調整が施されており、裏面はユビオ



第14図 出土遺物（墓ノ堂古墳1995形象埴輪①）



第15図 出土遺物（墓ノ堂古墳1995形象埴輪②）

サエ痕とナデ調整が施されている。馬形埴輪の体部と思われる。（第15図-99、写真図版15-1・2-99）

（古谷）

第3節 1998年立会調査

1. 調査の経過

平成10年度の立会調査については、四條畷市中野1丁目3-7ほかにおいてガス管理設が計画され、平成10（1998）年8月5日に大阪瓦斯株式会社から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。指導内容は工事立会が必要との通知があった。

同年10月22日、11月18日に立会調査を行った結果、埴輪片が3点出土したが、明確な遺構の検出はなかった。

（實盛）

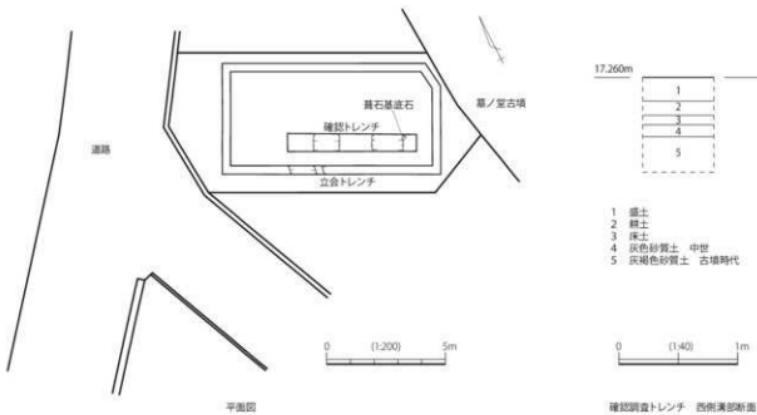
2. 出土遺物

84円筒埴輪 底部径：23.0cm（復元）。器高：9.3cm（残存）。厚さ：1.3～1.5cm。色調：外面は浅黄橙色（10YR 8/3）、内面は浅黄橙色（7.5YR 8/6）、断面は灰色（N 5/）。胎土：やや粗。直径2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：不良。外面はタテハケ調整、内面はタテハケ調整とユビオサエ調整が施されている。（第13図-84、写真図版17-1-84）

85朝顔形埴輪 胴径（最大）：27.6cm（復元）。器高：2.8cm（残存）。厚さ：1.1cm。色調：色調：外面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、内面は橙色（5YR 7/8）、断面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：やや粗。直径2mm以下の白色・灰色・黒色・赤色砂粒をやや多く含む。焼成：やや良好。外面はヨコハケ調整、内面はユビナデ調整が施されている。（第13図-85、写真図版17-1-85）

86朝顔形埴輪 幅：5.6cm（復元）。器高：6.9cm（残存）。厚さ：1.2～1.4cm。色調：外・内面は橙色（5YR 7/6）、断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや粗。直径5mm以下の白色・灰色・黒色砂粒を含む。焼成：やや良好。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整とのユビオサエ調整が施されている。（第13図-86、写真図版17-1-86）

（古谷）



第16図 調査地区平面図・断面図（墓ノ堂古墳2011立会）

第4節 2011年立会調査

1. 調査の経過

平成23年度の立会調査については、四條畷市中野1丁目854番5・6において個人住宅建設が計画され、平成23（2011）年8月16日に岩佐喜亀氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第93条第1項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。同年9月27日付け教委文第1-2416号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。同年10月5日付畷教社第831号で、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行なった。

平成23年9月26日に、計画用地内に1か所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、墓ノ堂古墳の周溝の一部とみられる溝状遺構および葺石の基底石とみられる石材を確認し、埴輪片が出土した。調査面積は約3.78m²であった。その結果をもって協議を行ない、届出者により遺跡を保存できるよう設計変更を行う旨が伝えられた。このため計画建物の基礎部掘削時に立会調査を行うことになった。平成23年10月28日に立会調査を行った結果、幅1.08mの溝状遺構を検出し、土師器が出土した。このため再度協議を行ない、届出者により遺跡を保存できるよう設計変更を行う旨連絡があった。

出土遺物については、平成23年10月5日付畷教社第832号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年10月11日に第2769号で受理された。大阪府教育委員会には同年10月5日付畷教社第833号で埋蔵文化財保管証を提出し、平成24（2012）年1月11日付教委文第3-209号で埋蔵文化財の認定があった。総量は遺物収納用コンテナ換算で計1箱であった。（實盛）

2. 検出遺構

この調査で検出したのは確認調査時に検出した墓ノ堂古墳埴丘葺石の基底石とみられる石材と周溝の一部とみられる溝状遺構、および立会調査時に検出した溝である（第16図、写真図版8-1）。

周溝 平成23年9月26日の確認調査で検出した。この時溝として2本の溝状遺構を検出したが、そのうち調査地区西寄りのものは幅1.1m、深さ約0.3mであった。一方調査地区東寄りのものは幅1.3mで、溝の北東端の現地表下0.8mの深度で人頭大の花崗岩を検出し、その南にも列状に並んでいた痕跡があった。東側に墓ノ堂古墳の残存埴丘が存在することから、この花崗岩は埴丘附近の基底石を検出したものと判断した。しかしこの時検出した遺構は周溝とするには狭く、深さも浅いものとみ

られることから、検出したのは周溝底部付近の起伏をとらえた可能性がある。また、10月28日に検出した下記の溝も同様に周溝底部付近の起伏をとらえた可能性がある。すなわち、9月26日に検出したうち東の溝の東側肩と、10月28日に検出した溝の西側肩との間が、周溝底部の幅を示す可能性があるとみる。そうであれば、周溝底部幅は4.9mとなる。いずれにしても、検出したのは周溝の底部付近とみられ、中世段階に削平されており本来の上端での周溝幅は判明しなかった。

溝 平成23年10月28日の立会調査で、調査地区南西寄りで検出した。幅1.08mの溝状遺構で、深さは遺構埋土の掘削を行わなかったため不明である。調査時はその様相から中世に属する可能性を考えたが、上述のとおり墓ノ堂古墳周溝底部付近の起伏をとらえた可能性がある。
(實盛)

3. 出土遺物

87朝顔形埴輪 幅：6.6cm。器高：5.2cm（残存）。厚さ：1.0～1.3cm。色調：外面は灰白色（7.5YR 8/2）、内面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。断面は褐灰色（10YR 6/1）。胎土：粗。直径3mm以下の灰色砂粒・雲母を含む。焼成：不良。内面はヨコハケ調整とユビナデ調整が施されている。（第13図-87、写真図版17-1-87）

88円筒埴輪 幅：4.0cm。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.9～1.2cm。色調：色調：色調：外面は淡橙色（5YR 8/4）、内面は浅黄橙色（10YR 8/3）、断面は褐灰色（10YR 6/1）。胎土：粗。直径4mm以下の白色・赤色砂粒・雲母を含む。焼成：不良。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整。突帯刺離部分で突帯設定技法はみられない。（第13図-88、写真図版17-1-88）

89土師器高环 脊部径（最大）：6.0cm（復元）。器高：5.3cm（残存）。厚さ：0.5cm。色調：外・内・断面は淡橙色（5YR 8/4）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色・赤色砂粒・雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外表面ナデ調整。（第13図-89、写真図版17-1-89）
(古谷)

第8章 調査のまとめ

今回報告した中野遺跡の4次にわたる調査および周辺調査では、遺跡南東部の墓ノ堂古墳周辺における状況を確認することができ、古墳時代から平安時代にわたる多くの成果があった。以下、遺構・遺物の時期ごとにまとめを行っていきたい。

平安時代 1997-1次および1998-1次調査でこの時期の遺構を検出した。両調査ともに井戸を検出しておらず、集落内的一部分を調査したものと考えられる。1997-1次調査の井戸1から瓦片が出土しており、北東約250mの位置にある正法寺跡との関連が考えられる。また、1998-1次調査井戸1で出土した焼塙土器は、市内で認識できたものとしては初の出土であった。

当遺跡は1991-1次調査の成果から、付近に官衙等重要施設の存在が想定される（村上・實盛2019b）。当遺跡の平安時代遺構については、調査を重ねながらそれを念頭に置いた景観復元を行っていきたい。

飛鳥時代 1999-2次調査でこの時期の遺構を検出した。市内で飛鳥時代の集落にかかる遺構を検出できた例は少なく、貴重な事例となった。古墳時代中期から後期にかけて市域では広範囲で馬飼いが行われ多くの遺構を検出するが、飛鳥時代には馬飼いは行われなくなり集落分布も希薄になると理解されることが多い。しかし雁屋遺跡の発掘調査では古墳時代後期から飛鳥時代まで継続する集落を検出している例もあり（村上・實盛2019a）、今後も調査の蓄積に努めたい。

古墳時代 2012-2次、1999-2次、1998-1次調査と、墓ノ堂古墳の立会調査でこの時期の遺構を検出した。墓ノ堂古墳の様相がある程度判明したことが大きな成果で、これについては次章で詳細を述べたい。それ以外には、1998-1次調査で掘立柱建物を検出したほか、1999-2次調査では馬の頭部を遺棄したとみられる井戸を検出した。市域においては古墳時代中期～後期に馬の飼育が行われていたとみられており、この井戸はTK208型式期に廃絶していることから、その段階にすでに周辺で馬飼いが行われていることを示す資料である。今後も調査を継続し、この地域における馬飼い集落の様相を明らかにしていきたい。
(實盛)

第9章 墓ノ堂古墳の検討

—大上古墳群の盟主墳—

1.はじめに

今回報告した墓ノ堂古墳の測量および立会成果により（本書第7章）、本古墳の新たな資料を報告することができた。これらの資料により、墓ノ堂古墳の詳細な位置づけについて検討することが可能となった。本稿では、これまでに明らかにされてきたものも含めた墓ノ堂古墳についての資料をまとめ、この古墳の位置付けについて新たな資料に基づき検討したい¹⁾。（實盛）

2. 墓ノ堂古墳の研究史

墓ノ堂古墳が初めて古墳として紹介されたのは、大正11年発行の『大阪府全志』においてであった（井上1922）。古墳は当時からすでに共同墓地として利用されていたが、「小高くして塚形」を為す墳形と、付近の「塚脇」の地名から、古墳であることが指摘された。また、「先年其の附近開墾の際に、埴輪・圓筒の破片を出せしといふ」として、埴輪が伴うことを示された。

大阪府の史蹟調査会常任委員であった平尾兵吾は、昭和3年の史蹟名勝天然記念物調査報告において初めて「墓の堂古墳」として名称を付した（平尾1928）。併せて、古墳南側に大同電力の送電鉄塔が建設された際には²⁾、周溝が検出されたことを述べた。また、旧の東高野街道がこの場所で迂回していることを、「大なる古墳を避けたるもの」と指摘した。加えて、昭和6年の北河内郡教育会の報告では、「西を正面とせし双子塚らしく、現在の墓地は前方の部分らしく思はれる」として、前方部を西に向けた前方後円墳と考えた（平尾1931）。

平尾のこの記述をもとに、墳形の検討が行われていくこととなった。山口博は昭和43年出版の著書の中で、「東側の後円部が削られたると縦五十米、幅三十米位の大古墳」と述べ、初めて埴丘規模の検討結果を示した（山口1968）。昭和47年刊行の市史では、その数値を修整し、「主軸100米にも及ぶ」と述べた（山口編1972）。

その後、櫻井敬夫が古墳西側の地形に注目し、昭和52年の著書の中で、現存の「中野の墓地がこの古墳の主要部分、すなわち後円部であるらしく」、「主軸はほぼ東西に約百二十米前後と推定することができる」とした。また「墓地最高所の老樹の下に大きな石があるという言い伝え」に言及した³⁾（櫻井1977）。この墳長と墳形にかんする見解はその後平成初期ごろまで踏襲されることとなった（四條畷市立歴史民俗資料館編1990、天野1990、天野・秋山・駒井1992、一瀬1995）。

その状況に変化が生まれたのは、昭和17年撮影の航空写真の検討が行われたことによるものであった。そのことが最初に記述されたのは平成9年のことで、野島稔が「全長62m」と指摘を行った（野島1997c）、平成20年に行われた講演会では詳しい検討内容の報告があった（野島2009）。航空写真に写っていた古墳に隣接する「建物の大きさを計測しそこから前方後円墳の長さを計算」したもので、昭和17年当時の残存墳丘の規模が判明した。また、この検討により古墳が南北方向で前方部を北に向いていることがわかった（四條畷市史編さん委員会編2016）。

古墳の築造時期については、櫻井敬夫が古墳時代中期という認識を示し（櫻井1977）、河内一浩が出土埴輪について川西宏幸による円筒埴輪編年（川西1978）IV期と指摘した（河内1987）。これに基づき『前方後円墳集成』ではその6～7期と編年された（天野・秋山・駒井1992）。出土埴輪は平成9年に初めて写真が掲載され（野島1997c）、井上主税が須賀賀のものが含まれることを指摘し（井上2003）、西本和哉が実測図を紹介した（西本2009）。

このように、墓ノ堂古墳はこれまでの研究により、古墳時代中期後半築造で墳長約62mの前方後円墳との位置づけがなされてきた。しかし、現在墓地であることもありこれまで埴丘測量図は作成できておりらず、出土埴輪も西本和哉が一部を紹介したのみであり、詳細な検討のための基礎資料が不足している状況であった。このため、本書7章で述べた通り航空レーザー計測の手法を用い測量図の作成を行うとともに、出土埴輪の報告を行なうに至った。（實盛）

3. 墓ノ堂古墳の墳形

平成28年度に、四條畷市では大東市とともに飯盛城跡の保存活用を推し進めるため、城跡の三次元航空レーザ計測を実施することとなり、平成28（2016）年7月1日にアジア航測株式会社によりロビンソン・ヘリコプター製R44 II航空機を用い、Trimble社製レーザ計測機材Harrier56を使用して1.0m×1.0mメッシュあたり10点以上の精度で航空レーザ計測を行った。

その後の整理過程で計測範囲に墓ノ堂古墳の墳丘が含まれていることが判明したため、墓ノ堂古墳周辺について計曲線1m、主曲線20cmで測量図の作成を行った。また、航空レーザ計測の成果を用い、赤色立体地図の作成を行った。（本書第7章）（實盛）

墓ノ堂古墳は、第7章において報告した測量図では変が認められ、墳丘の規模や墳形など検討の余地が残る。検討を進めるにあたり、航空写真と航空レーザ測量図を基礎資料とした。また、1995年立会調査で周堤が、2011年立会で埴丘裾の基底石が確認されており、それも反映した。航空写真を用いた検討は、城郭の構造解明に利用されており、有効であると考えられる（岡寺2019）。そこで、国土地理院のホームページで閲覧できる「地図・空中写真閲覧サービス」を利用し、アメリカ軍撮影の昭和23年空中写真を用いて検討を行った。なお、より鮮明なもので検討を行うために、高解像度のものを取り寄せた。この写真をみると墓地が立地する埴丘は樹木がみられること以外全体の形状におおきな変化はみられない。以下、墓ノ堂古墳の墳丘の規模や墳形などについてみていく。

まず、後円部側からみていく。測量図の墳丘と考えられる部分の南西外側に、T.P.+17.2~17.8mラインにやや乱れるものの円弧を描く部分があり、これを元に径を求め、さらに中心点を確定した。中心点はX=-139,950、Y=-32,743で、O点とする（上田1969）。この円弧を周堤平坦面の埴丘側傾斜変換点とし、その径は66.7mである。1995年の立会調査で確認された遺構から周堤平坦面幅を4m程度とした。これにより周堤平坦面の外側傾斜変換点を径74.7mとした。後円部径はO点をもとに、2011年の立会調査の図面を測量図におとし、埴丘裾の基底石と考えられる石列から径47.3mとした。この後円部の復元を空中写真に当てはめると、埴丘の周間にみられる色調の濃淡とも一致する。

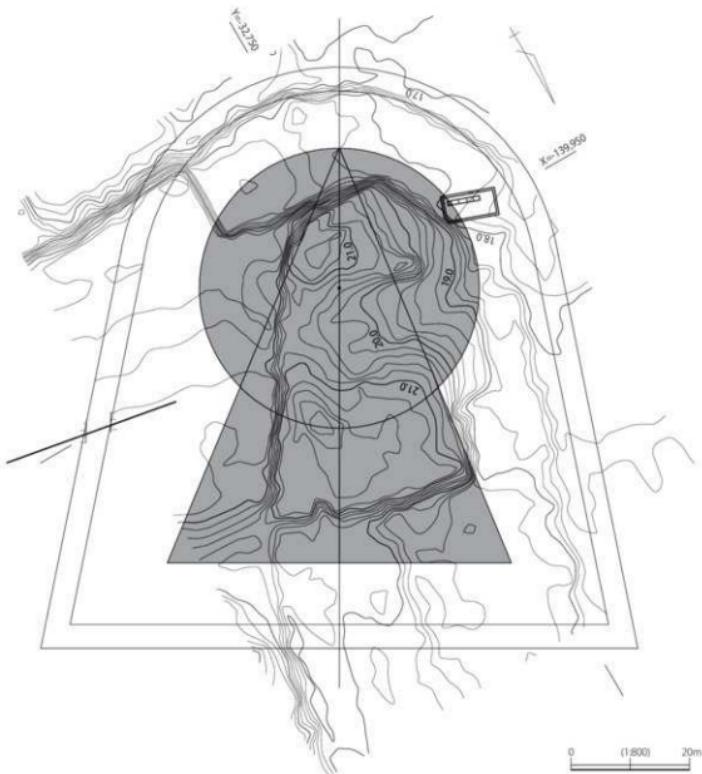
次に前方部側をみていく。前方部については、墳丘の復元を行う要素が乏しいため前方部側周堤から復元を行った。埴丘東側では1995年立会調査で周堤がみつかっており、この図面を測量図におとした。西側については反転を行った。前方部側周堤の復元を空中写真に当てはめると、西側に通る東高野街道や周囲にみられる色調の濃淡と一致する。前方部正面周堤は、現在宅地化され現状をとどめていないが、空中写真を確認すると、痕跡と考えられる畔状の地形が存在する。また、墓ノ堂古墳西側を通る東高野街道が、この畔状地形と交わる場所で北東側に屈曲していることから、前方部正面周堤を確定した。埴丘の前方部は、埴丘と周堤との幅が後円部側で確定しており、約10mである。前方部正面の埴丘と周堤の幅についても同様であるとし、約10mとした。前方部側面については、埴丘西側斜面、空中写真にみられる色調の濃淡、墓ノ堂古墳に残存するくびれ部の現地形から決定した。なお、墓ノ堂古墳の東側と西側では約2m前後の高低差がある。

以上のように墳形の検討から墓ノ堂古墳は、墳長約70m、後円部径47.3m、くびれ部幅約34m、前方部長22.7m、前方部幅約58mの前方後円墳で、周堤と周溝を伴い、両者を含めた兆域の全長約98m、最大幅約101mに復元できる。西側部分の周堤はのちに東高野街道として利用されているとみられる。墳形は後円部に対して、前方部が比較的短く、開いた形状をしている。

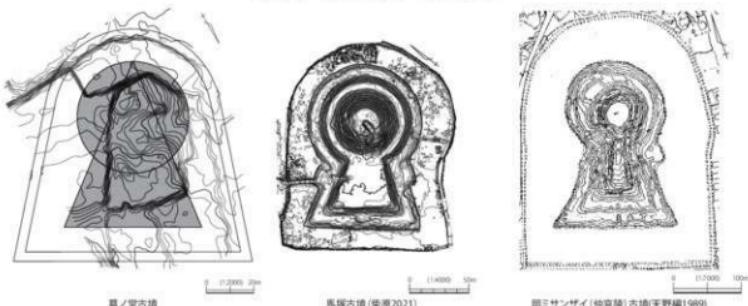
墓ノ堂古墳と埴丘形状が類似する古墳をあげていく。以下、2古墳について検討を行う。

まず、三重県名張市に所在する美旗古墳群最大の馬塚古墳である。墓ノ堂古墳と馬塚古墳を比べると比較的形態に共通性がある。しかし、馬塚古墳は基壇の上に後円部2段・前方部1段構造をもつ前方後円墳であることが判明しており（柴原2021）、本来の墳丘と比較すると類似性が薄い。また、墓ノ堂古墳は後述するが古墳時代後期初頭築造に対し、馬塚古墳は中期後葉であり、若干の開きがある。以上のことから、馬塚古墳の基壇を含めた比較で類似するものの、両古墳の関係性を示す証左には乏しいといえる。ただし、墓ノ堂古墳の東側と西側では約2m前後の高低差があり、この高低差をうめるための基壇施設が存在した可能性がある。墳丘の調査を行っていないため確定できるわけではないが、存在したとすれば十分に関係性を考えることは可能であろう。

次に、大阪府藤井寺市に所在する岡ミサンザイ古墳である。墓ノ堂古墳と岡ミサンザイ古墳を比べ



第17図 墓ノ堂古墳 墳丘復元図



第18図 墓ノ堂古墳と墳形が類似する古墳

ると、墓ノ堂古墳と築造時期が近似するが、測量図上の埴丘の形態には類似性を見出せない。しかし、岡ミサンザイ古墳は、後世の改変が著しく埴丘構造に不明な点が残されており、後円部については現状より埴丘裾が外側に、前方部については現状より内側にあるとされている（福尾・清喜1998）。これを考慮し比較すると十分に共通性を考えることができる。また、岡ミサンザイ古墳は同時期最大規模を誇り、墓ノ堂古墳も北・中河内地域で唯一の埴丘長を誇る。両者に関係性があったとみることは十分に可能であろう。

（古谷）

4. 墓ノ堂古墳の出土遺物と築造時期

墓ノ堂古墳では第7章で報告したように、1995年・1998年・2011年の立会調査で、円筒埴輪・朝顔形埴輪・馬鹿形人物埴輪・武人埴輪・馬形埴輪・蓋形埴輪・家形埴輪・大刀形埴輪等が出土している。

このうち円筒埴輪は、外面調整タテハケ、内面調整ナデとハケを施す。円形透孔を配置する。突帯間隔設定技法はみられない。底部径23.0cmのものがあるが、胸部径29.4~35.4cmとやや大型のものが大半を占めるようである。破片のみで段数が不明なものの5条6段以上と考えられる。このように、外面調整タテハケのみで突帯はやや突出しているものの突帯設定技法が省略されており、川西編年（川西1978）のV期に位置づけられる。

また、形象埴輪は出土状況から周堤上に樹立していた可能性が極めて高く、各種形象埴輪が揃った堤上埴輪祭祀が執り行われていたといえる。古墳時代中期中葉から一部の古墳で周堤上に形象埴輪が並んだようであるが（小浜2005）、主流となるのは古墳時代後期になってからであり、これは「後期埴輪様式」ともいわれ（東影2018）、古墳時代後期にあたる。

以上、出土埴輪の検討から墓ノ堂古墳は古墳時代後期に築造されたことがわかった。築造時期をさらに詳細にしづるために、隣接する大上古墳群の様相を確認しておきたい。

（古谷）

5. 大上古墳群における円筒埴輪

墓ノ堂古墳に隣接する大上古墳群は、四條畷市大字清瀧を中心に所在する古墳時代中期から後期にかけての古墳群で、前方後円墳・帆立貝形古墳・円墳・方墳からなり、これまでに合計15基の古墳を調査で確認している（村上・實盛編2017）。なかでも3号墳は墳長37.5m、周溝を含めた全長約45mの帆立貝形古墳で（村上2006）、近接する全長約40mの前方後円墳とみられる4号墳（野島1999）と並び、高所部において顯著な規模を持つ。このうち、大上2号墳・3号墳・6号墳・7号墳・8号墳・9号墳・10号墳・12号墳・14号墳の9基から円筒埴輪が出土する。また、その周辺にも古墳の存在を示す遺構が検出された箇所がある。墓ノ堂古墳の埴輪の様相や時期比定をするうえで不可避と考えられ、埴輪の様相を中心にならため概要を以下で記述する（第1表）。

大上2号墳（四條畷市史編さん委員会編2016、村上・實盛編2017） 墳形・埴丘規模は不明であるが、周溝と思われる溝から蓋形埴輪と形象埴輪基部底部に押付突帯を貼りつけるもの（東影2010）、および円筒埴輪5個体以上出土している。すべて底部径15cm前後で小型品である。このうち4個体は、底部から口縁まで残存している¹⁾。すべて、4条5段構成で、2・4段目または2・3・4段目に円形透孔を配置する。外面調整はタテハケ、内面調整はナデである。底部調整が施され、突帯まで板状工具が当たるもののが存在する。すべて、口縁部に「↑」のヘラ記号が施される。突帯間隔設定技法はみられない。底部高は9.0~10.0cm前後、突帯間隔は9.0~10.0cm前後、口縁部高7.5~9.5cm前後である。もう1個体は、須恵質で3条4段まで残存する。2段目に円形透孔が配置され、3段目には透孔が配置されないことから2・4段目に円形透孔が配置されたと推定される。外面調整はタテハケ、内面調整はナデ、底部調整が施され、外面調整は右上がりのタテハケで、左利き工人の存在が指摘できる。底部高と突帯間隔は9.0~12.0cm前後である。

大上3号墳（村上2006） 墳丘長37.5mの帆立貝形古墳で、底部径15cm前後、口縁部径最大25cmで、3条4段の円筒埴輪が出土し、2・3段目に円形透孔を配置する。外面調整はタテハケ、一部個体でヨコハケ、内面調整はナデである。また、蓋形埴輪と鞍形埴輪が1個体ずつ出土している。円筒埴輪は、正立と倒立による焼成が行われている。正立て焼成を行なうものは、底部高10cm前後、突帯間隔9cm前後である。これに伴うものか不明であるが、口縁部高6.5cmのものが存在する。倒立焼成のもの

第1表 大上古墳群出土埴輪の組成

名称 (調査記号)	墳形	規模	埴輪	時期	円筒	蓋形	家形	石見型	盾形	範形	大刀形	人物	馬形	形象基部 押付突帯	主な遺物・その他
墓／堂上墳	前方後円	70	○	後期初頭	○	○	○	△	△	△	○	○	○	○	刀子・馬具・馬齒 周溝内埋葬2基
大上1号墳 (OG1992-1)	円	19.4	×	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
大上2号墳 (OG1992-2・ 2017-1)	不明	不明	○	後期前半	○	○							○		鳥形ハバウ・馬齒 不明形象埴輪
大上3号墳 (JO1997-1・ JO1999-1・ KMH・JO2003-2)	帆立貝形	35.3	○	中期後葉 (TK23~47)	○	○				○					二段築成
大上4号墳 (OG1996-2)	前方後円	40	×	中期末	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器類・臼玉
大上5号墳 (OG1996-2)	不明	不明	不明	後期											横穴式石室・金環
大上6号墳 (OG2013-1)	不明	不明	○	後期前半	○	○		○				○			臼玉・馬齒
大上7号墳 (OG2013-2)	不明	不明	○	後期前半 (TK10古柏)	○			○	○						
大上8号墳 (OG2013-2)	(円)	16.4	○	後期前半	○										土器類・馬齒
大上9号墳 (OG1994-1)	方	不明	○	後期初頭 (MT15)	○			○	○						不明形象埴輪
大上10号墳 (OG1996-1)	不明	不明	○	後期	○										鉄鎗・鉄鉢
大上11号墳 (OG1999-1)	(円)	27		後期											土器類
大上12号墳 (KMH1995-1)	方	22	○	中期中頃 (TK73~216)	○	○									
大上13号墳 (NS1996-1)	方	15	×	後期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土器類
大上14号墳 (KMH1996-1)	方	16	○	中期後半	○										鉄斧
大上15号墳 (KMH1995-1・ 2003-1)	方	20	○	中～後期								○			鉄斧
大上16号墳 (NS1996-1)	方	17	○	後期	○	○		○		○		○			
大上17号墳 (NN1993-1)	方	20	×	後期？	-	-	-	-	-	-	-	-	-		埋葬施設
黒石古墳	不明	不明	○	不明	○										陶棺

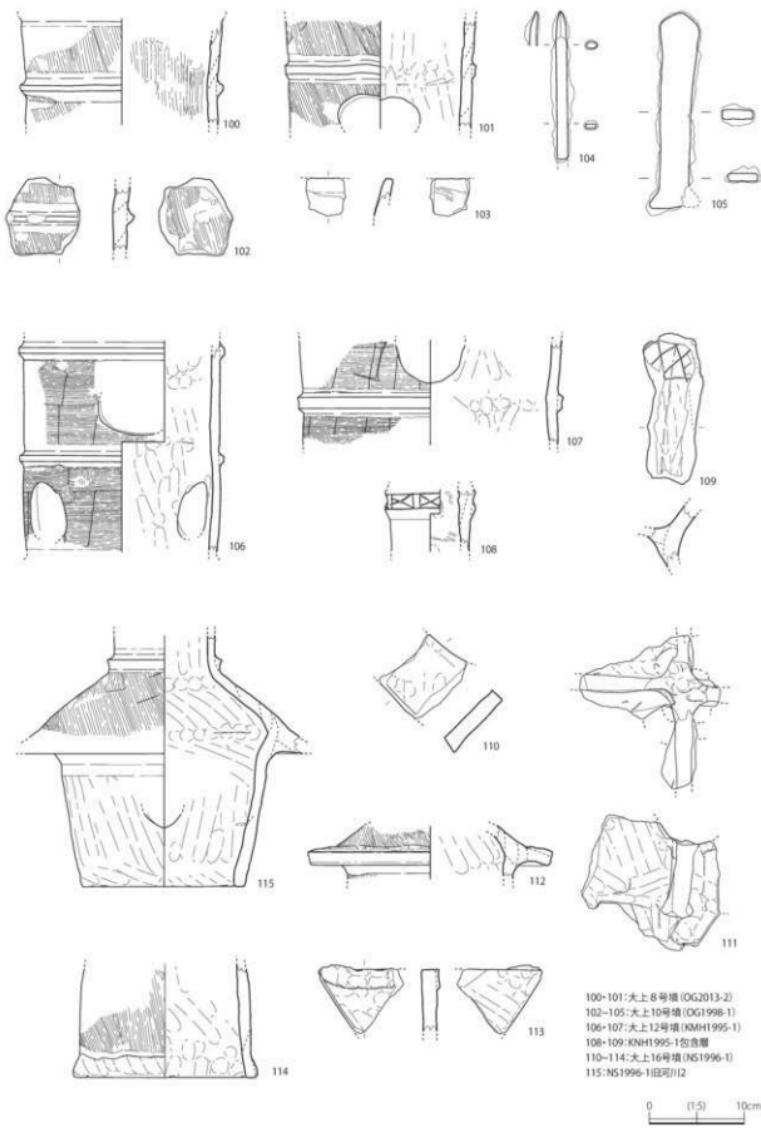
は底部調整を行い、底部高13~16cm前後、突帯間隔10~12cm、口縁部高10~13cmである。

大上6号墳（村上・實盛編2017） 墳形・埴丘規模は不明であるが、円筒埴輪と石見型埴輪・蓋形埴輪などが出土している。円筒埴輪は、底部径15~20cmで、4条5段構成2・4段目に円形透孔、外面調整はタテハケ、内面調整はナデ、底部調整が施される。突帯間隔設定技法はみられない。底部高は8.4cmと11.4cm、突帯間隔10~12cm前後、口縁部高9~10cm前後である。

大上7号墳（村上・實盛編2017） 墳形・埴丘規模は不明であるが、円筒埴輪と石見型埴輪・盾形埴輪が出土する。円筒埴輪は、底部径17cm前後で、外面調整はタテハケ、内面調整はナデ、底部調整が施され、突帯まで板状工具が当たるもののが存在する。突帯間隔設定技法はみられない。底部高は8cm前後と12cm前後、突帯間隔12cm前後、口縁部高10cm前後である。

大上8号墳（村上・實盛編2017） 直径16.4mの円墳で円筒埴輪の破片が出土している（第19図-100・101）。胴部径は20cm前後で、外面調整はタテハケ、内面調整はナデとハケを施す。円形透孔を配置する。突帯もしくは口縁部が割れた破片があり、間隔は8.0cm±である。

大上9号墳（村上・實盛編2017） 周溝の直径約10mの円墳と考えられているが、あらためて出土遺物を含め確認を行った。周溝と考えられる溝からコンテナ約14箱分の埴輪が出土しており、直径約10mの円墳としては大量といえる。測量図を見る限り、周溝肩部は延長5.5m分を検出できただけであり、方墳の隅部における屈曲を検出した可能性を考えられる。これらのことから、本墳については方墳として取り扱いたい。円筒埴輪と、盾形埴輪、上辺を突起や粘土で加飾する石見型埴輪などの形象埴輪が出土する。円筒埴輪は、複数個体出土している。底部径15cm前後である。突帯間隔設定技法はみられないものの、底部高9~12cmの一群と14~16cmの一群が存在する。底部高9~12cmのものは



第19図 大上古墳群出土埴輪・鉄製品

底部調整がケズリで、底部高14~16cmのものは底部調整が板オサエである。突帯間隔11cm、口縁部高9.5cmで、2段目と4段目に円形透孔を配置する。

大上10号墳（野島・村上1999） 墳形は不明であるが古墳の周溝とみられる溝（溝1）を検出したもので、周溝内及び包含層から円筒埴輪片数点が、周溝の西側に隣接する位置から鉄鉗、鉄錠が出土した。円筒埴輪はその他の古墳と同様のもので古墳時代後期のものといえる（第19図-102・103）。鉄鉗は報告において刀子と記述していたもので、鉄錠は鉄刀としていたものである（第19図-104・105）。鉄錠は長さ20.5cm、重さ235.8gで、朝鮮半島加耶地域でみられる形態に近い特徴を持つ。

大上12号墳（村上2006） 一辺22mの方墳で5個体以上の円筒埴輪と家形埴輪が出土している。このうち円筒埴輪は、外面タテハケ調整のみのものと、外面調整は底部タテハケ調整、2段目はBc種ヨコハケが施されるものがある。内面調整はナデ調整である。底部径は14.0cm前後である。底部高は12cm前後で、突帯間隔10.9cmである。2段目には円形透孔を配置する。そのほかに、最下段は残存しないが、胴部で約2条3段分残存し、Bb種ヨコハケが施されるものがある。突帯間隔11.4cmである。円形透孔を連段で配置する（第19図-106）。また、ヘラ記号をもつものがある（第19図-107）。

なお、同一調査の包含層出土で12号墳に伴わないものであるが、剣形埴輪と思われる把緒部が出土している（第19図-108）。これは同様のものが中野遺跡9次調査でみつかっている（西尾1987）。加えて、中央分割帶を斜格子文で分割する石見型埴輪が出土している（第19図-109）。

大上14号墳（村上2006） 一辺16mの方墳で1個体の円筒埴輪が出土している。口縁部径36.8cmで、5条6段以上と思われる。外面調整はタテハケで、一部ヨコハケ調整を施す。内面調整はナデである。口縁部高と口縁部下1段目は9.0cm前後である。突帯間隔は11.5cm前後である。接合しないものの同一個体と思われる底部が存在し、底部高は17.5cm、底部径は26.4cmで、底部調整が施される。

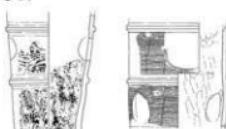
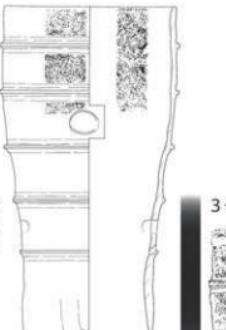
大上16号墳（村上2000） 四條畷小学校内遺跡では1996年度調査のB地区で13号墳を確認しているが、D地区の土坑54からも円筒埴輪が出土している。この遺構は、遺構面検出精査後に断面で確認した遺構のため、平面形態が不明確で、上面で検出した浅い落ち込みと一連のもので、実際は幅約2.5mの溝である可能性が報告されている。また、同一遺構面での溝と平行に走る最大幅約2.7mの溝9が検出されている。さらに、両遺構が位置する箇所には一段階古い旧河川（旧河川1）が存在したと報告されているが、両遺構検出面において埴輪片がまとまって出土しており、旧河川1に属するものとして報告されている。調査断面図を確認すると、両遺構のベース面となる土層とそれより上層とでは土層堆積が異なっており、これは土質の違いから堆積時期に起因するものとみられる。この遺構面（第2遺構面）の段階で両遺構に挟まれた箇所は一度何らかの削平が行われている可能性が高い。遺構面検出の埴輪片はこの時遺存したものであろう。これらのことから、両遺構に挟まれた部分に古墳丘が存在した可能性が考えられ、これを大上16号墳とした。規模は一辺約17mで方墳とみられる。出土埴輪は土坑54出土として報告された底部径15.8cm、底部高10.0cm、突帯間隔10cm前後の円筒埴輪と、溝1出土として報告された中央分割帶を斜格子文で分割する石見型埴輪があり、これ以外に大刀形埴輪、蓋形埴輪の立脚部、上辺を粘土で加飾する石見型埴輪、形象埴輪基部底部に押付突帯を貼りつけるものがある（第19図-110~114）。なお、関連資料として同一調査でD地区の旧河川2から蓋形埴輪が出土している（第19図-115）。

（寅盛・古谷）

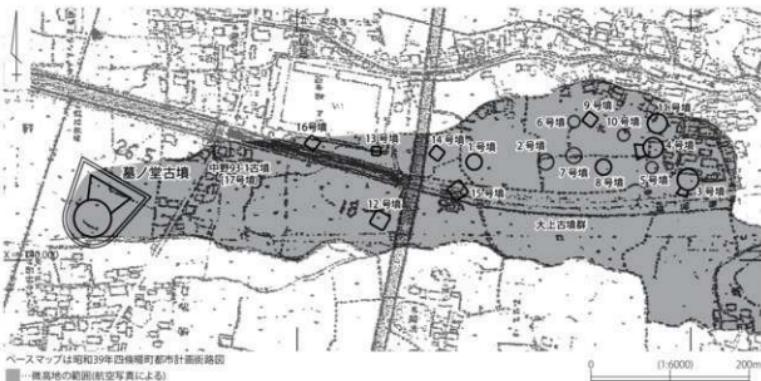
6. 大上古墳群の変遷と埴輪生産

墓ノ堂古墳や大上古墳群を考えるうえで重要な遺跡が存在する。これまで埴輪が並んだ集落跡として考えられてきた忍ヶ丘駅前遺跡である。同遺跡では、大溝や土坑などから、古墳時代中期中葉から後期の円筒埴輪や形象埴輪が大量に出土している。このようなあり方は通有の集落跡とは一線を画しており、集積地などの埴輪生産に関連する遺跡と考えられる。また、こういった状況は同様に岡山南遺跡でもみられ、これらの遺跡は周辺域³⁾に埴輪を供給した一つの拠点であった可能性がある。

さて、大上古墳群では、まず12号墳を嚆矢として古墳が築造され始める。12号墳では、Bb・Bc種ヨコハケがみられ、底部高や突帯間隔、窯窓焼成などの要素から、TK73~TK216型式期に位置づけられる。なお、ヘラ記号をもつものがあるが（第19図-107）、この個体は比較的忍ヶ丘駅前遺跡のものと近似し、同遺跡から一部供給された可能性がある。

時代	埴輪 編年 (川西1978)	須恵器 編年 (田辺1981)	忍ヶ丘 駅前遺跡	大上古墳群
古墳時代中期	T K 73			12号墳  (村上2006年改変 ・再トレース)
	T K 216			
	T K 208 (古)			14号墳  (村上2006年改変 ・再トレース)
	T K 208 (新)			
	T K 23			3号墳  (村上2006)
	T K 47			
	M T 15			9号墳 
	T K 10 (古)			墓ノ堂古墳 
	T K 10 (新)			7号墳  (村上・貴重編2017)
	T K 43			2・6・8・16号墳  6号墳 (村上・貴重編2017) 16号墳 (村上2000)

第20図 大上古墳群出土円筒埴輪の変遷



第21図 墓ノ堂古墳と大上古墳群の位置関係

中期後半になると、やや大型の円筒埴輪が出土する14号墳と3条4段の円筒埴輪が出土する3号墳が築造される。14号墳は一辺16mの方墳でありながらやや大型の円筒埴輪がみられる一方、墳丘長37.5mの帆立貝形古墳である3号墳では3条4段の小型のもので、円筒埴輪の規格が墳丘の規模や形態と対応しないことがうかがえる。両墳では底部調整を行う共通点があるものの、それ以外では共通性を見出せず、古墳ごとに個別に埴輪が供給されたといえる。さらに、3号墳の埴輪はバリエーションに富んでおり、一古墳においても複数の製作集団の関与が想定される。14号墳では底部高17.5cm、3号墳では底部高16cmと突堤間隔に対して底部高が高いものが主流となっている。

続いて後期初頭に9号墳と墓ノ堂古墳が築造される。9号墳は底部調整から異なる工人集団の存在がうかがえるものの、4条5段構成など全体のプロポーションに齊一性が認められる。墓ノ堂古墳は大型品を主体とすることが明らかである。両古墳は同一の工人集団による製作が想定され⁶⁾、複数の古墳に埴輪が供給されたといえる。この段階でも、突堤間隔に対して底部高が高いものが存在する。

次段階では、2・6・7・8・16号墳と多くの古墳が築造される。このうち7号墳は、出土した須恵器からTK10型式古相段階で、2・6・8・16号墳についてもほぼ同時期である。複数の工人集団の関与がうかがえるものの底部調整はほぼ統一化され、古墳を超えた同一の工人集団による製作が想定され、複数の古墳に埴輪が供給されたといえる。

以上のように大上古墳群では、中期後半から後期にかけて、①底部調整を行う、②底部高の縮小化、という共通事項が認められるものの、埴輪生産の連続性を認めることはできない。一方、後期初頭に北・中河内地域で隨一の墳丘長を誇る墓ノ堂古墳築造を契機に埴輪生産体制の刷新がうかがえる。墓ノ堂古墳を頂点とし、それ以外の古墳では4条5段の円筒埴輪が採用され、古墳の階層秩序に応じた作り分けが行われていたといえる。異なる製作集団を超えて齊一性が認められるようになる。TK10型式期には底部調整の統一化も図られる。また、形象埴輪からも、①多彩な形象埴輪が供給されるようになること、②各種形象埴輪が削った堤上埴輪祭祀の採用など、形象埴輪が著しく少ない中期後半の当古墳群とは別様である。

(古谷)

7. 墓ノ堂古墳の位置付け—讃良を基盤に河内湖を見据えた大上古墳群の盟主墳—

以上のように、墓ノ堂古墳の墳形および築造時期について検討してきた。本墳を周辺地域において位置づける上では、先述のとおり近隣に位置する大上古墳群との関係性を捉えることが必要である。

大上古墳群と、墓ノ堂古墳との位置関係をみたのが第21図である⁷⁾。これみると、大上古墳群と墓ノ堂古墳は、中小流路等に挟まれた同一の微高地に築造されていることがわかる。両者の間には距

離があるため、一見するとその関係性は不明瞭に感じられるが、両者のほぼ中間の位置で、中野遺跡1993-1次調査において古墳の埋葬施設を検出している（四條畷市史編さん委員会編2016）。この古墳は周辺の調査で検出した落ち込みとの関係が指摘されており、そうであれば一辺20m程度の方墳の可能性があり、これを大上古墳群の17号墳として取り扱うべきだろう。また、四條畷小学校内遺跡の今回大上16号墳とした方墳もその周辺に所在している。これらのことは、大上古墳群と墓ノ堂古墳との間の空白地帯にも、未発見の古墳が存在する可能性を示すものといえるだろう。墓ノ堂古墳は、大上古墳群の造営主体と深い関係性を持つ被葬者が埋葬されているものと考える。

また、墓ノ堂古墳それ自体の築造位置に着目すると、大上古墳群が存在する微高地の最も先端の位置に造られている。古墳より西は標高が下がり、西に200m程の位置で検出した古墳時代の遺構面（南野米崎遺跡、村上・實盛2016）は古墳頂部との比高差が10m近くある。遺跡の検出状況からみると古墳から南西にわずか1km程で河内湖の湖岸最奥部が存在したとみられ、墳頂部の標高が現存でも約T.P.+21mある墓ノ堂古墳は、河内湖を行き交う船上からよく確認できたことであろう。この古墳は、河内湖を意識した立地選定がなされているといえる。

大上古墳群の造営主体は、馬具や馬歛、製塙土器の出土や、朝鮮半島との交渉に密接なかかわりを持った地域から出土する傾向の強い石見型埴輪（和田2006）の出土などから、讃良地域で馬飼いを行っていた集団と考えられる（野島2008、2009、村上・實盛編2017）。墓ノ堂古墳は、広義の大上古墳群の盟主といえる規模を持っており、同時期の北・中河内地域でも唯一の墳丘長である。被葬者は同古墳群の造営集団を指導する立場にあり、河内湖や清滝越え等⁸⁾を用いた流通を広範に掌握管理していた人物だった可能性があるのではないだろうか⁹⁾。（實盛）

8. おわりに

このように、墓ノ堂古墳の意義について、そして大上古墳群との関係について検討してきた。墓ノ堂古墳では周堤上埴輪祭祀が行われ、同時期の北・中河内地域の規模を持ち、被葬者は大上古墳群の造営集団を指導する立場にあり、河内湖等を用いた流通を広範に掌握管理していたとみられる。周堤はのちに東高野街道築造へ利用されることとなった。これまで、基礎資料の不足から墓ノ堂古墳の理解については困難な部分が多かったが、今回の報告および検討によりある程度の材料を提供することができた。今後も調査、検討を重ね、当地域の歴史復元を行っていきたい。（實盛）

註

- 1) 本稿は、野島稔、村上始の指導のもと、實盛良彦、古谷真人の協議に基づき、1、2、7、8節を實盛が、4、6節を古谷が、3、5節は両者共同で執筆し、全体を實盛が取りまとめたものである。
- 2) この鉄塔は、現在の地図とアメリカ軍撮影の昭和23年空中写真（国土地理院・写真図版9）との比較から判断すると、現在の位置より20mほど東の位置に建っていたものとみられる。
- 3) この「老樹」は、現在は既に枯れてしまつており存在しない。当時の写真（写真図版8-2など）をもとに検討すると、墳丘上にはこのころまでは2本樹木が生えていたようである。墓地の利用者にその当時の状況を聞くと、後円部側の、現在の墓地進入路脇に1本と、前方部側の、現在の最高所部に1本が存在したようである。特に前方部側のものは写真を見る限り樹齢を重ねた様相を呈しており、「言い伝え」の該当箇所は前方部側の最高所部である蓋然性が高い。ただ、今ではそこも墓地となっているが、「老樹」の枯死後に石材が確認されたような証言は得ることができなかつた。
- 4) 検討の余地が残るが、この出土状況から円筒埴輪を据え置いたものが転落した可能性がある。
- 5) 大上古墳群、清滝古墳群、更良岡山古墳群、三味頭遺跡などがあげられるだろう。
- 6) 今後報告予定であるが、9号墳の円筒埴輪は墓ノ堂古墳の円筒埴輪と同一のハケメが認められる。
- 7) 第21図の作成にあたっては、昭和39年作成の四條畷町都市計画道路図を下図とし、アメリカ軍撮影の昭和23年空中写真（国土地理院）の実体視を行い参考しながら、微高地の範囲を記入した。
- 8) 大上古墳群と同種の石見型埴輪や、押付突縁を貼りつける基部底部をもつ形象埴輪は、木津川流域を中心多く分布し、河内湖や淀川に加え、陸路の清滝越え等を用いた流通路の存在を示唆する。
- 9) そのような人物の例としては、『日本書紀』雜体天皇元年条に記述のある河内馬飼首荒籠などがあげられよう。

参考文献

- 青柳泰介2020「近畿地方中核部における家形埴輪について」『埴輪論叢』第10号、埴輪検討会。
- 後川恵太郎・宮盛良彦・井上智博編2015『讃良郡条里遺跡』四條畠市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
- 阿部幸一1999『埴輪跡発掘調査概要』IV、大阪府教育委員会。
- 天野末喜1990『大阪「古墳時代の研究」第10巻地域の古墳 I 西日本・雄山閣出版。
- 天野末喜編1989『古岡村』藤井寺市教育委員会。
- 天野末喜・秋山浩三・駒井正明1992『河内』『扇方後円墳集成』近畿編、山川出版社。
- 一瀬和夫1995『全国古墳年鑑』雄山閣出版。
- 井上主税2003『北河内地域の古墳編年—埴輪を中心として—』『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会。
- 井上智博・多賀晴司2003『讃良郡条里遺跡、その2、財团法人大阪府文化財センター』。
- 井上智博編2000『大阪府全志』卷之四、大阪府全志発行所。
- 今西康宏・渡井彰乃2011『大王の儀礼の場—今城塚古墳にみる家・門・壇の埴輪—』高槻市立今城塚古代歴史館。
- 今西康宏2016『王權儀礼に奉仕する人々』高槻市立今城塚古代歴史館。
- 今西康宏2017『威儀のもの—王權儀礼の威容を示す埴輪—』高槻市立今城塚古代歴史館。
- 岩瀬 透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明2010『鶴屋北遺跡』I、大阪府教育委員会。
- 岩瀬 透・透編2012『鶴屋北遺跡』II、大阪府教育委員会。
- 岩本正二・大久保徹也2007『備訓瀬戸の土器製造』吉備考古ライブラリー15、吉備人出版。
- 上田宏範1969『前方後円墳』学生社。
- 上田 陵2003『古墳時代における円筒埴輪の研究動向と編年』『埴輪論叢』第5号、埴輪検討会。
- 梅原未治1937『河内四條畠村志岡古墳』『日本古文化研究所報告』第4、日本古文化研究所。
- 梅原未治1985『銅鏡の研究』木耳社。
- 大賀克彦2002『古墳時代の時期区分』小羽山古墳群』清水町教育委員会。
- 大阪府教育委員会編1970『四条駅町、正法寺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
- 岡寺 良2019「航空写真を利用した中世山城調査—国土资源院所蔵写真を中心に—」『文化財の歳』第7号、文化財方法論研究会。
- 小野忠熙1961『六連島遺跡』『山口県文化財概要』第4集、山口県教育委員会。
- 片山長三1967a『枚方台地の先土器時代遺跡』『枚方市史』第1巻、枚方市役所。
- 片山長三1967b『圓文時代遺跡』『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 加藤一郎2010『雲部安堵古墳の須頭一窓密成専用人の諸問題—』『雲部安堵古墳の研究』兵庫県立考古博物館。
- 鍛方正樹1999『2条奈良の円筒埴輪』『埴輪論叢』第1号、埴輪検討会。
- 鍛方正樹2003a『円筒埴輪の地域性と工人の動向』『埴輪』第52回理藏文化財研究集会実行委員会。
- 鍛方正樹2003b『井戸の考古学』同成社。
- 鍛方正樹・中島和彦・根上直子1995『奈良市秋篠町奈良少年出土埴輪の研究（上）（下）』『古代文化』第47巻第5・6号、古代学会。
- 鍛方正樹・安井宣也・中島和彦1992『管原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題』『奈良市理藏文化財センター紀要1991』 奈良市教育委員会。
- 河内一皓1987『大東市の埴輪』『大東区道路発掘調査報告書』大東市教育委員会。
- 川西宏幸1978『円筒埴輪説』『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会。
- 岸本直文2004『前方後円墳の埴丘規模』『大阪市立大学大学院文学研究科紀要 人文研究』第55巻第2分冊、大阪市立大学院文学研究科。
- 木下保明編2004『小路遺跡（その3）』（財）大阪府文化財センター。
- 木村 理2018『古墳時代中期における古市古墳群出土埴輪の系統と生産』『考古学研究』第65巻第1号、考古学研究会。
- 黒須亜希子編2004『高宮遺跡（その2）』（財）大阪府文化財センター。
- 黒田 淳1989『阪盛山遺跡の調査』『大東市埋蔵文化財発掘調査概要』1988年度、大東市教育委員会。
- 黒田 淳1997『高宮遺跡第3次発掘調査概要報告書』大東市立新町遺跡調査会。
- 黒田 淳2013『阪盛山遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
- 古代学研究会編2020『地域社会の展開と手工業生産—埴輪生産遺跡と集落・古墳の対比から—』古代学研究会。
- 古代の土器研究会編1992『都城の土器集成』古代の土器研究会。
- 古代の土器研究会編1993『都城の土器集成』II、古代の土器研究会。
- 近藤章子・山本雅和・多賀晴司編2006『讃良郡条里遺跡』IV、財团法人大阪府文化財センター。
- 小浜 成2003『円筒埴輪の観察視点と編年方法』『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会。
- 小浜 成2005『埴輪による儀礼の場の変遷過程と王権』『王権と儀礼【埴輪像像の世界】』大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 佐伯博光・八辻彩香編2007『讃良郡条里遺跡』V、財团法人大阪府文化財センター。
- 櫻井敬夫1972『考古学』『四條畠市史』第1巻、四條畠市役所。
- 櫻井敬夫1977『鶴の歴史・鶴の文化財』四條畠市・四條畠市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2006『こども歴史 わたしたちの四條畠』四條畠市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2010『歴史とみどりのまち ふるさと四條畠』四條畠市教育委員会。
- 四條畠市教育委員会編2002『みどりの風と古跡』第17回特別展、四條畠市立歴史民俗資料館。
- 四條畠市教育委員会編2004『馬と生きる』開館20周年記念特別展、四條畠市立歴史民俗資料館。
- 四條畠市教育委員会編2008『ひとつぶの糸』第23回特別展、四條畠市立歴史民俗資料館。
- 四條畠市教育委員会編さん委員会編2016『四條畠市史』第5巻考古編、四條畠市。
- 四條畠市立歴史民俗資料館編1990『はるかなる日々—四條畠の史跡・文化財—』四條畠市・四條畠市教育委員会。
- 柴原聰一郎2020『前方後円墳の埴丘長の規格性』『東京大学考古学研究室研究紀要』33号、東京大学考古学研究室。
- 柴原聰一郎2021『馬塚古墳測量調査報告書』『環伊勢湾地域所在古墳の測量調査』第1冊。

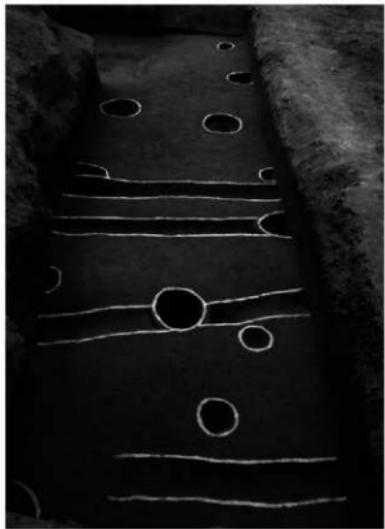
- 瀬川芳則1992「最古の木版下駄」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV、同刊行会。
- 関 真一2007「生駒山西麓における円筒埴輪の様相」『埴輪論叢』第6号、埴輪検討会。
- 大東市北新町遺跡調査会編1991「北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書」大東市北新町遺跡調査会。
- 大東市教育委員会・四條畷市教育委員会・大阪府教育委員会・大阪府立歴史民俗博物館・大阪府立歴史民俗博物館研究会編1993「阪盛城跡発掘調査概要」大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
- 田辺昭三1981「須恵大成」角川書店。
- 中世土器研究会編1995「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社。
- 辻川哲郎2019「馬形埴輪と馬形陶人物埴輪」『馬の考古学』雄山閣。
- 辻本 武1987「難波城跡発掘調査概要」大阪府教育委員会。
- 寺沢 萬1986「畿内土式土器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会。
- 寺沢 萬・森岡秀人編1989「弥生土器の様式と編年」近畿編 1、木耳社。
- 中尾智行・山根 航編2009「讃岐馬路里遺跡」雄・財団法人大阪府文化財センター。
- 中村 浩2001「和泉陶器出土須恵器の型式編年」芙蓉書房出版。
- 新納 泉2011「前方後圓墳の設計原理試論」『考古学研究』第58巻第1号、考古学研究会。
- 新納 泉2018「前方後圓墳の設計調査概要と墳丘大型化のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集、国立歴史民俗博物館。
- 西尾 宏1987「中野山跡発掘調査概要」IV、四條畷市教育委員会。
- 西尾 宏1988「中野山跡発掘調査概要」V、四條畷市教育委員会。
- 西本と哉2009「生駒山西麓地域における古墳時代中期の古墳群形成の特質」『考古学研究』第55巻第4号、考古学研究会。
- 野島 稔1977「中野山跡発掘調査概要」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1978a「中野山跡発掘調査概要」II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1978b「南山下遺跡」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1978c「大阪府四條畷市見発見の製瓦土器」『古代学研究』第86号、古代学研究会。
- 野島 稔1979a「岡山南遺跡出土の古代下駄」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1979b「大阪府下における要埴器出土遺跡」『ヒストリア』第82号、大阪歴史学会。
- 野島 稔1980a「清滙古墳群発掘調査概要」四條畷市文化財研究調査会。
- 野島 稔1980b「四條畷市奈良井遺跡(2)」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1980c「四條畷市奈良井遺跡」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1981「更良岡山古墳群発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1982「岡山南遺跡発掘調査概要」II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1983「忍ノ上駅前遺跡発掘調査概要」II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1984a「雁屋遺跡発掘調査概要」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1984b「河内内の馬廻」「万葉集の考古学」筑摩書房。
- 野島 稔1985「四條畷市南野米崎遺跡」「まんだ」第24号、まんだ編集部。
- 野島 稔1986a「四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要—1985年度—」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1986b「中野道跡発掘調査概要」III、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987a「雁屋遺跡」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987b「岡山南遺跡発掘調査概要」IV、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987c「四條畷市・南山下遺跡出土の馬形埴輪」「まんだ」第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1987d「四條畷市・南山下遺跡」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987e「南野米崎遺跡」「韓式系土器研究会」。
- 野島 稔1988「南野米崎遺跡」「韓式系土器研究」I、韓式系土器研究会。
- 野島 稔1990「四條畷市・中野道跡」「まんだ」第39号、まんだ編集部。
- 野島 稔1991「南野米崎遺跡」「韓式系土器研究」III、韓式系土器研究会。
- 野島 稔1992「四條畷市・大上道跡」「まんだ」第47号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993a「四條畷市忍ケ丘駅前遺跡」「まんだ」第49号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993b「四條畷市謙田遺跡(一)」「まんだ」第50号、まんだ編集部。
- 野島 稔1994a「雁屋遺跡発掘調査概要—四條畷市江瀬町在所—」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1994b「四條畷市謙田遺跡(二)」「まんだ」第51号、まんだ編集部。
- 野島 稔1994c「四條畷市・四條畷市小学校前遺跡」「まんだ」第53号、まんだ編集部。
- 野島 稔1995「南野道跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1996a「四條畷市坪井遺跡」「まんだ」第57号、まんだ編集部。
- 野島 稔1996b「観治工房のある風景」「まんだ」第58号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997a「五絃の琴」「まんだ」第60号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997b「四條畷市更良岡山遺跡(一)」「まんだ」第62号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997c「はにわはともだち」第12回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 野島 稔1999「四條畷市大上古墳群」「まんだ」第66号、まんだ編集部。
- 野島 稔2000「更良岡山古墳群発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔2006「四條畷市中野道跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔2008「王権を文えた馬」「牧の考古学」高志書院。
- 野島 稔2009「河内南東部における古墳と古代豪族の動向」「北河内の古墳」財団法人交野市文化財事業団。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1976「岡山南遺跡発掘調査概要」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1977「正法寺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・前田 幡1984「岡山南遺跡・中野道跡発掘調査概要」III、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始1999「正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2000「奈良井遺跡」奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2001「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2002「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。

- 野島 稔・村上 始「貴盛良彦2012『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』」四條畷市教育委員会。
- 原田昌則・尾崎良史2014『考古資料からみる八尾の歴史』公益財團法人八尾市文化財調査研究会。
- 東影 悠2008「古墳時代中期から後期における円筒埴輪の規格とその変質—円筒埴輪の4条5段構成化—」『特兼山遺跡』IV、大阪大学理学文化財調査委員会。
- 東影 悠2010「形象埴輪の製作技術—形象基部倒立技法の研究—」『特兼山考古学論集』II、大阪大学考古学研究室。
- 東影 悠2018a「古墳時代中期の埴輪編年と野中古墳出土埴輪」『特兼山考古学論集』III、大阪大学考古学研究室。
- 東影 悠2018b「古墳時代後期における埴輪生産と埴輪様式の特質」『ヒストリア』271、大阪歴史学会。
- 平尾兵吾1928「北河内郡」『大阪府史稿名跡天然記念物』第三冊、大阪府学部。
- 平尾兵吾1931「北河内郡史蹟史話」北河内郡教育会(1973年増補再刊)。
- 廣瀬 覚2019「埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成」『考古学研究』第66巻第3号、考古学研究会。
- 福尾正彦・清喜裕二1994「惠我長野西陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第49号、宮内庁書陵部。
- 藤田道子2010「都屋北遺跡出土の埴塗器の一考察」『日本古代の王權と社會』堀書房。
- 松岡良應1987「中野遺跡発掘調査概報」四條畷市教育委員会。
- 宮崎泰史・藤永正明編2006「年代のものさし」大阪府立近づ飛鳥博物館。
- 宮野淳一1992「更良町1号遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会。
- 三好 玄・杉本厚典・野口 稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期周囲溝状遺構に伴う土器群」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号、財团法人大阪市文化財協会。
- 六辻香織編2003「小堀遺跡」III、(財)大阪府文化財センター。
- 村上 始1997a「木間池北方遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始1997b「忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2000「四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001a「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001b「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001c「大阪府議田遺跡の調査速報」『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。
- 村上 始2001d「四條畷市議田遺跡『まんだ』」まんだ編集部。
- 村上 始2001e「大阪府議田遺跡の調査速報」『記録考古』第21号、祭祀考古学会。
- 村上 始2001f「四條畷市鷹屋遺跡『まんだ』」第73号、まんだ編集部。
- 村上 始2003a「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2003b「大阪・中野遺跡」木簡研究、第25号、木簡学会。
- 村上 始2004「四條畷市中野遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2006「一般国道163号の払込工事に伴う発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第14回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
- 村上 始・貴盛良彦2013a「中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2013b「北山遺跡・御良郡条里遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2014「四條畷市文化財調査年報」第1号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2016「四條畷市文化財調査年報」第3号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2017「四條畷市文化財調査年報」第5号、中野遺跡・四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2019a「雁屋遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2019b「四條畷市文化財調査年報」第6号、中野遺跡2・四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2019c「雁屋遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・貴盛良彦2019d「四條畷市文化財調査年報」第4号、大上遺跡(大上古墳群)、四條畷市教育委員会。
- 村瀬 陸2018「粘土付からみた石見型埴輪の地域性」『埴輪論叢』第8号、埴輪検討会。
- 村瀬 陸2019「菅原東遺跡出土石見型埴輪の検討」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成30年度』奈良市教育委員会。
- 山口 博1968「四條畷町の歴史」。
- 山口 博編1972「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博1990「四條畷市史」第4巻、四條畷市役所。
- 山田幸弘他2014「仲良天皇古墳」藤井寺市教育委員会。
- 李 聖子編2020「阪盛城跡総合調査報告書」大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
- 和田一之輔2005「摺印有名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『特兼山考古学論集』、大阪大学考古学研究室。
- 和田一之輔2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』第53巻第3号、考古学研究会。
- 和田一之輔2012「形象埴輪の編年と系統」『文化財論叢』IV、奈良文化財研究所。
- 和田一之輔2015「石見型埴輪の東国波及と上番」『利根川』37、利根川同人。
- 和田一之輔2017「近畿地方における鞍形埴輪2類の展開と背景」『古代文化』第68巻第4号、古代学協会。
- 和田一之輔2019「埴輪の大刀と劍」『考古学雑誌』第102巻第1号、日本考古学会。
- 和田一之輔2020「近畿地方の形象埴輪配置 宮室導入期以降を中心に」『埴輪研究会誌』第24号、埴輪研究会。

写 真 図 版 1



1. 調査地区近景（南西から・N N 2012-2）



2. 調査地区近景（北から・N N 2012-2）



3. 調査地区近景（北から・N N 2012-2）

写 真 図 版 2



1. 調査地区全景（南東から・N N1999-2）

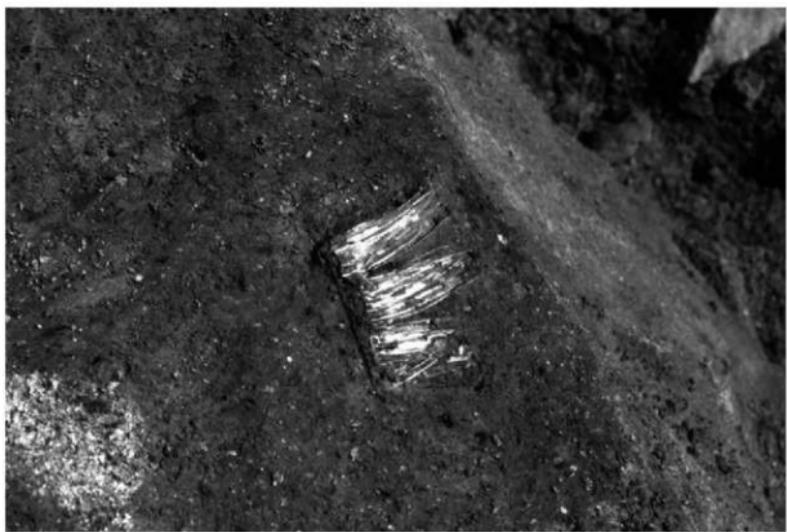


2. 溝 4 遺物出土状況（北西から・N N1999-2）

写 真 図 版 3



1. 井戸 1 断面（南から・NN1999-2）



2. 井戸 1 馬歯出土状況（西から・NN1999-2）

写 真 図 版 4



1. 調査地区近景（東から・N N1998-1）

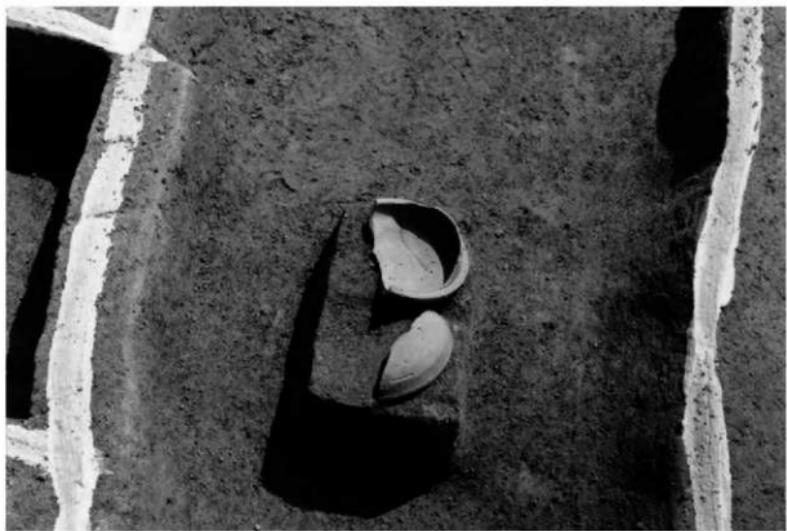


2. 挖立柱建物全景（西から・N N1998-1）

写 真 図 版 5



1. 土坑 5 (井戸) 井戸枠内検出状況 (東から・N N 1998-1)



2. 溝 3 遺物出土状況 (西から・N N 1998-1)

写 真 図 版 6



1. 調査地区全景（北から・N N 1997-1）



2. 調査地区断面（北西から・N N 1997-1）

写 真 図 版 7



1. 調査地区全景（東から・墓ノ堂古墳1995立会）



2. 調査地区断面（西から・墓ノ堂古墳1995立会）

写 真 図 版 8



1. 確認調査トレンチ全景（西から・墓ノ堂古墳2011立会）

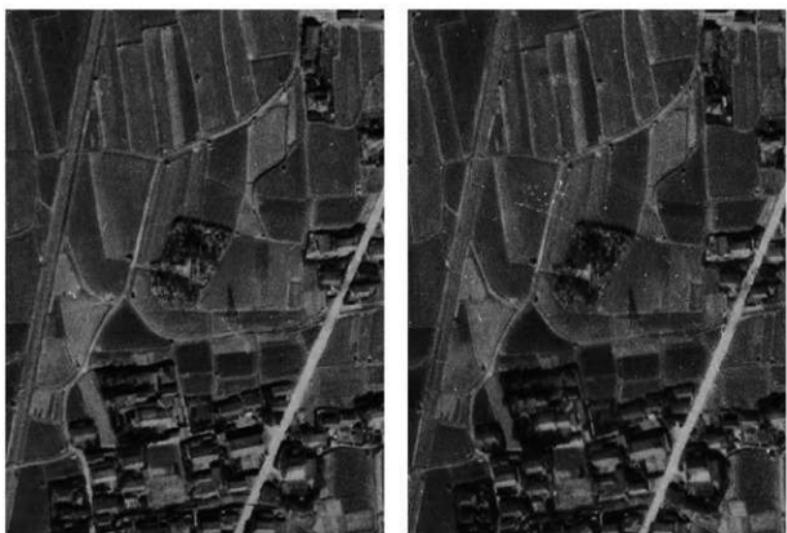


2. 墓ノ堂古墳全景（昭和53年頃）

写 真 図 版 9

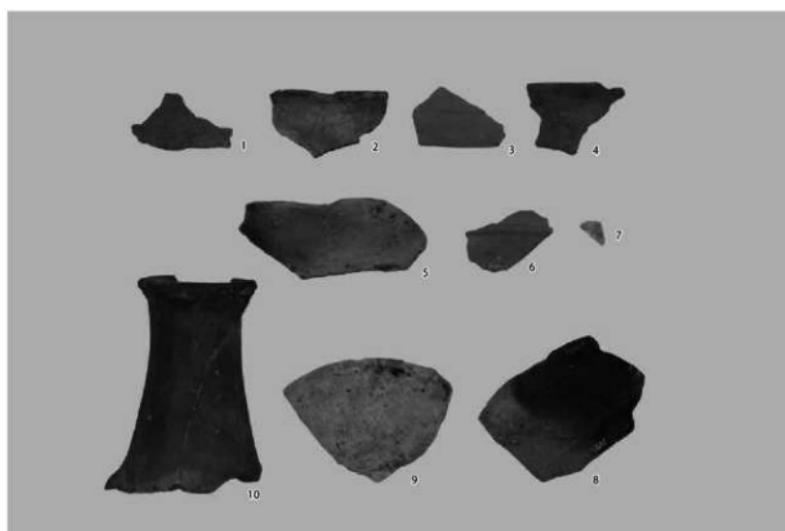


1. 墓ノ堂古墳・大上古墳群垂直写真（昭和23年3月27日米軍撮影・国土地理院）



2. 墓ノ堂古墳垂直立体写真（昭和23年3月27日米軍撮影・国土地理院）

写 真 図 版 10

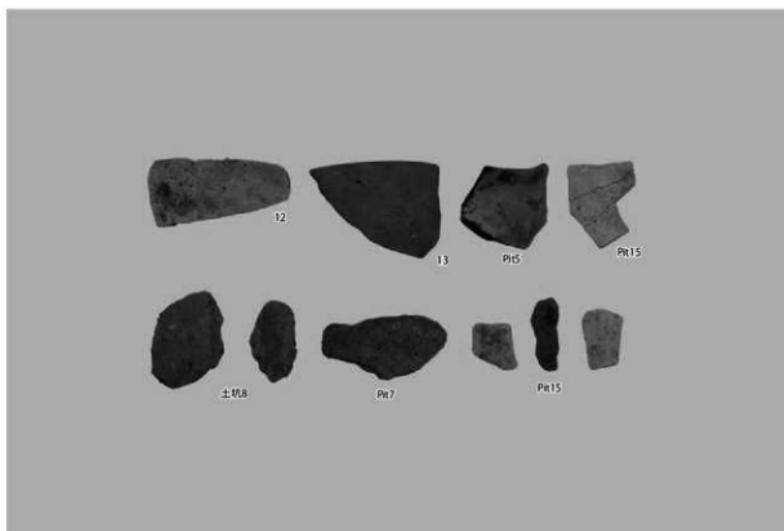


1. NN2012-2 出土遺物



2. NN1999-2 出土遺物（溝・土坑・包含層）

写 真 図 版 11

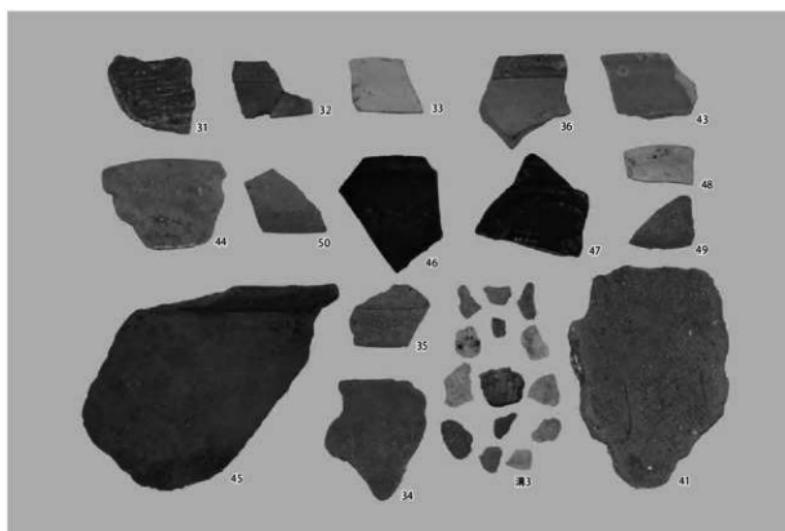


1. NN1999-2 出土遺物（土坑・Pit）



2. NN1999-2 出土遺物（井戸1）

写 真 図 版 12

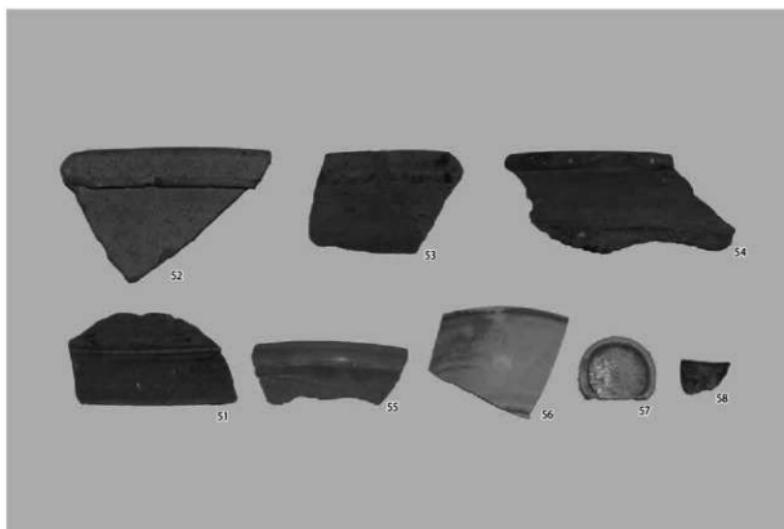


1. NN1998-1 出土遺物（溝・土坑・Pit）

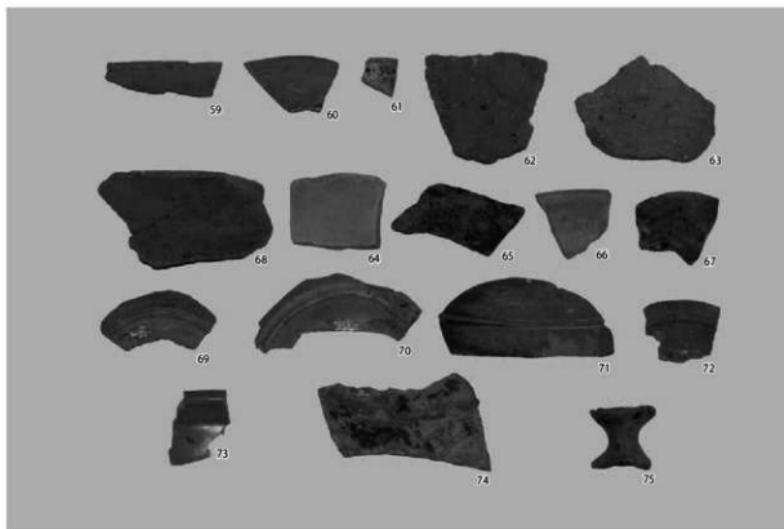


2. NN1998-1 出土遺物（溝3・土坑1）

写 真 図 版 13

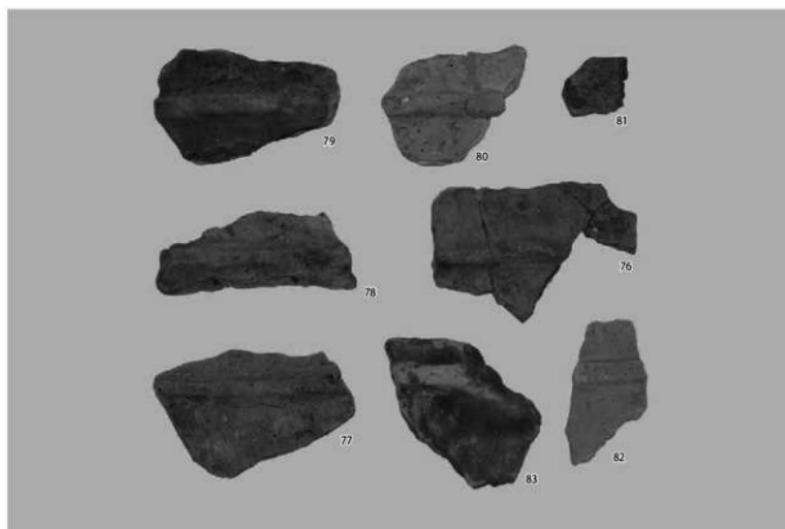


1. NN 1998-1 出土遺物（包含層）

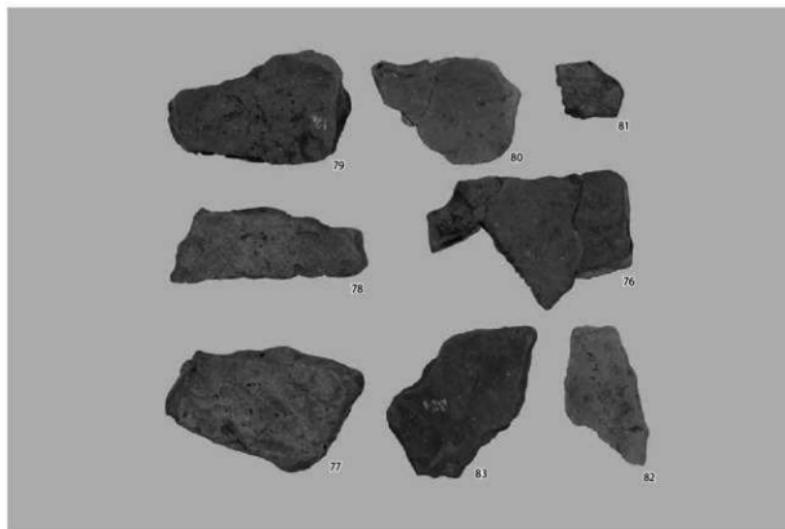


2. NN 1997-1 出土遺物

写 真 図 版 14

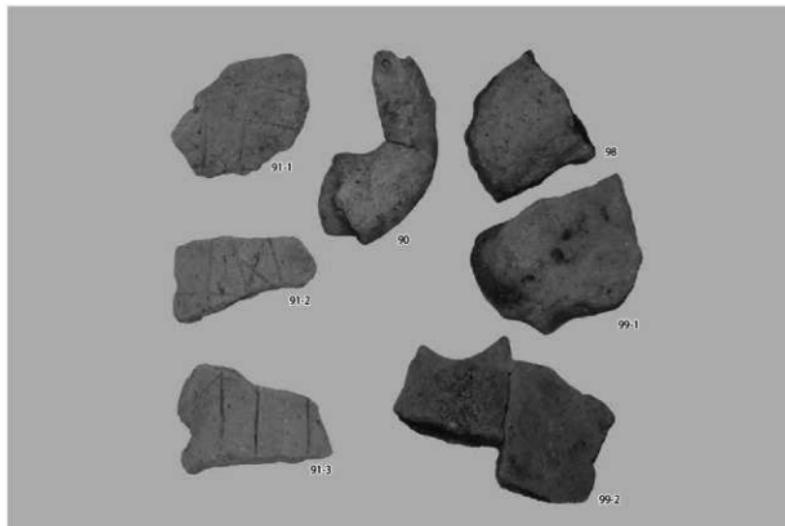


1. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（円筒埴輪・表）

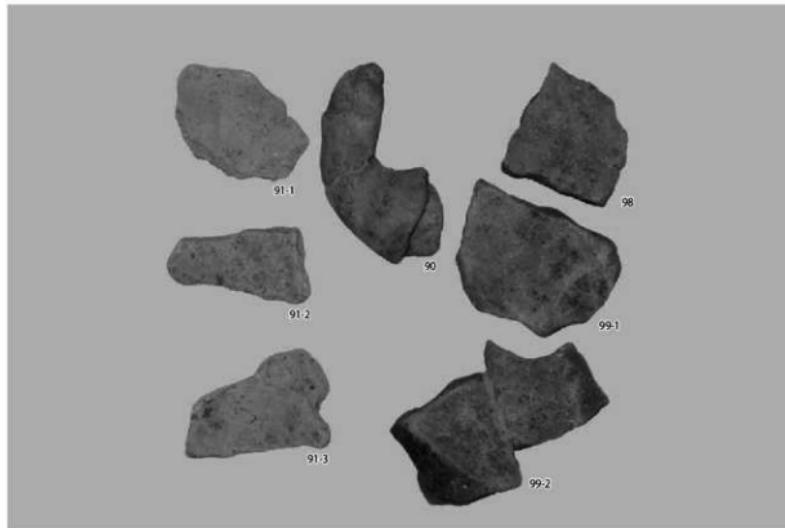


2. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（円筒埴輪・裏）

写 真 図 版 15

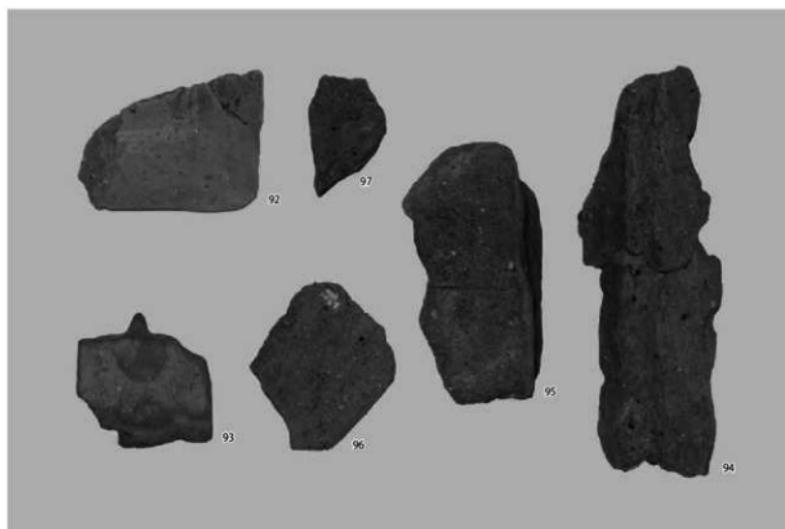


1. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（形象埴輪①・表）



2. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（形象埴輪①・裏）

写 真 図 版 16

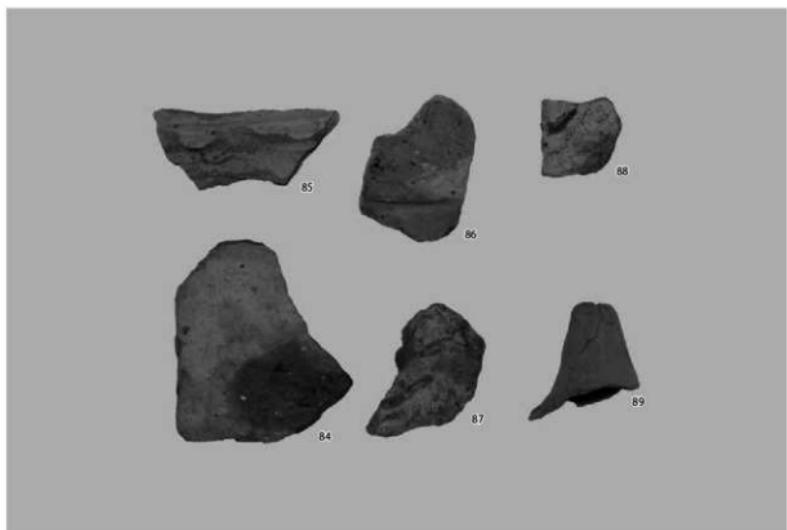


1. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（形象埴輪②・表）



2. 墓ノ堂古墳1995立会 出土遺物（形象埴輪②・裏）

写 真 図 版 17



1. 墓ノ堂古墳1998・2011立会 出土遺物



2. 大上古墳群 出土遺物

写 真 図 版 18



1. 大上10号墳（O G 1998-1）出土遺物



2. 大上16号墳（N S 1996-1）出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぼう 四條畷市文化財調査年報
巻次	第8号
副書名	中野遺跡 3 (墓ノ堂古墳)
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第60集
編著者名	村上 始・實盛良彦・古谷真人
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2021(令和3)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかのいせき 中野遺跡 (NN2012-2)	しじょうなわてし なかのいっちょうめ 四條畷市 中野一丁目	272299	34° 44' 20"	135° 38' 32"	平成24年 6 月 4 日～11 日	123m ²	宅地造成
なかのいせき 中野遺跡 (NN1999-2)	しじょうなわてし なかのいっちょうめ 四條畷市 中野一丁目	272299	34° 44' 20"	135° 38' 36"	平成11年 9 月13日～17 日	145m ²	店舗建設
なかのいせき 中野遺跡 (NN1998-1)	しじょうなわてし なかのいっちょうめ 四條畷市 中野一丁目	272299	34° 44' 20"	135° 38' 34"	平成10年 8 月25日～9 月9日	262m ²	宅地造成
なかのいせき 中野遺跡 (NN1997-1)	しじょうなわてし なかのいっちょうめ 四條畷市 中野一丁目	272299	34° 44' 18"	135° 38' 41"	平成10年 1 月26日～29 日	79m ²	宅地造成
はかのどう こふん 墓ノ堂古墳	しじょうなわてし なかのいっちょうめ 四條畷市 中野一丁目	272299	34° 44' 17"	135° 38' 33"	平成 7 年10 月11・12日、 平成10年10 月22日、11 月18日、平 成23年 9 月 26日、10月 28日(立会) 平成28年 7 月 1 日(測 量)	—	公共下水道 設置、ガス 管理設、住 宅建設 (立会) 保存目的 (測量)

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野遺跡 (NN2012-2)	集落跡	古墳	溝、土坑、 Pit	土師器、須恵器、瓦器、製塙土器	
中野遺跡 (NN1999-2)	集落跡	古墳、飛鳥	井戸、溝、 土坑、Pit	土師器、須恵器、馬齒	馬の頭部を遺棄した井戸
中野遺跡 (NN1998-1)	集落跡	古墳、平安	掘立柱建物跡、溝、井戸、土坑、 Pit	土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器、燒塙土器、陶磁器	古墳時代後期の掘立柱建物 平安時代の方形板棒井戸
中野遺跡 (NN1997-1)	集落跡	平安	井戸、溝、 Pit	土師器、須恵器	平安時代の井戸
墓ノ堂古墳	古墳	古墳	周溝、周堤	埴輪	初の測量図作成 復元墳長約70m 古墳築造を古墳時代後期 初頭と推定

四條畷市文化財調査報告 第60集

四條畷市文化財調査年報

第8号

中野遺跡 3

(墓ノ堂古墳)

令和3年(2021)3月31日発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
大阪府四條畷市中野本町1番1号

印刷 株式会社 近畿印刷センター